

第31回全国修学旅行研究大会

— 報告書 —

大会主題

【感性をはぐくむ修学旅行】

研究主題

【学びの集大成を図る修学旅行】

— 被災地復興への継続的支援 —

平成 26 年 7 月 29 日(火)

ホテルグランドヒル市ヶ谷

公益財団法人全国修学旅行研究協会

目 次

主催者挨拶

岩瀬 正司	公益財団法人全国修学旅行研究協会理事長・・・・・・・・・・	1
-------	-------------------------------	---

来賓挨拶

高橋 正敏	文部科学省初等中等教育局視学官・・・・・・・・・・	3
石原 大	観光庁観光産業課長・・・・・・・・・・	5

ご挨拶

田ヶ原 聡	近畿日本ツーリスト株式会社代表取締役専務・・・・・・・・	7
-------	------------------------------	---

全修協提案

「修学旅行に何を求めるのか」		
中西 朗	公益財団法人全国修学旅行研究協会前理事長・・・・・・・・	9

実践発表①

「東北には人を変える場の力がある」		
中嶋 利昭	福岡県筑紫女学園中学・高等学校 前校長・・・・・・・・	13
	(福岡県立修猷館高等学校 前校長)	

実践発表②

「被災地学校修学旅行支援事業」		
佐伯 登志男	愛媛県経済労働部しまのわ 2014 推進監・・・・・・・・	23

講 演

「修学旅行の思い出と防災」		
平野 啓子	語り部・かたりすと、元 NHK キャスター・・・・・・・・	30
	大阪芸術大学教授、防災検定協会理事長	

【主 催 者 挨拶】



公益財団法人全国修学旅行研究協会
理事長 岩瀬 正司

皆様、こんにちは。私は、只今ご紹介いただきました、公益財団法人全国修学旅行研究協会の理事長、岩瀬正司と申します。本日はお暑い中、しかも公私ともご多用の中、多数の皆様方には、第31回全国修学旅行研究大会にご参加いただきまして、ありがとうございます。

また、ご来賓の

文部科学省初等中等教育局視学官 高橋正敏 様、

観光庁 観光産業課長 石原大 様

そして賛助会員並びに私ども協会の事業にご理解いただき支援して下さっている皆様方を代表しまして

近畿日本ツーリスト株式会社 代表取締役専務 田ヶ原聡 様

にはご多用にもかかわらず、ご出席いただきましたこと、深く感謝申し上げます。

私たち全国修学旅行研究協会は、「感性をはぐくむ修学旅行」を主題として、様々な視点から調査・研究を行ってまいりました。その結果を受けて生徒たちにとってより充実した修学旅行を実現するための様々な方策を考え、関係機関への働きかけ等も行っているところです。さらに一昨年度より「学びの集大成を図る修学旅行」という研究主題のもと、修学旅行の原点である「学ぶ」という事について改めて考察をしております。

修学旅行はまさに「学びの場」であり、「修学旅行は学習旅行」でもあります。そこで本日は最初に全修協提案として「修学旅行に何を求めるのか」と題して、私の前任の 中西 朗前理事長より、修学旅行の今日的あり方及び喫緊の課題でもあります、修学旅行の危機管理について提案をさせていただきます。

また、未曾有の東日本大震災から3年有余が経過しました。私たち公益財団法人全国修学旅行研究協会は、「被災地復興への継続的支援」を事業目標の一つに加え、今私たちにできることはどんな小さなことでもやっつけよう、ということで活動しています。

一昨年はこの東日本大震災を教訓として、修学旅行の安全確保に焦点を当て、パネルプロポジションを行いました。昨年は「被災地への修学旅行、被災地からの修学旅行」と題して、二つの中学校の実践事例を発表していただきました。3年目になる本年は、一つは校長先生の強い思いで実現した被災地訪問の例として、福岡県立修猷館高等学校及び筑紫女学園中学・高等学校の前校長、中嶋 利昭 先生から発表していただきます。またもう一つは被災地の学校の修学旅行を全県を挙げて受け入れた愛媛県の取り組みの様子を、愛媛県経済労

働部しまのわ2014推進監の佐伯 登志男様から報告させていただきます。

後半の講演は、元NHKキャスターで語り部・かたりすととしてご活躍中の平野啓子 様
にお願ひ致しました。平野様のプロフィールはプログラム8ページに掲載してありますが、
「語り」というものを通じて日本語の美しさや日本文化を国内外に紹介しており、総合芸術
としての「語り」を開発なさっています。また、内閣府の中央防災会議専門調査会委員、文
部科学省中央教育審議会委員を歴任され、一般財団法人防災検定協会理事長としてジュニ
ア防災検定を立ち上げるなど、幅広くご活躍されています。

今回は「修学旅行の思い出と防災」ということで様々なお話をお聞かせいただけることと
期待しております。

盛りだくさんの内容となっておりますが、どうぞ最後までご清聴の程よろしくお願ひ致し
ます。

【 来 賓 挨 拶 】



文部科学省初等中等教育局
視学官 高橋 正敏

本日、第31回全国修学旅行研究大会が、盛大に開催されますことを心よりお慶び申し上げます。本大会を主催される公益財団法人全国修学旅行研究協会におかれましては、日頃より、修学旅行に関する実態調査や研究活動、情報提供など、様々な活動を行い、有意義な修学旅行の実現に取り組まれていることに、深く敬意を表します。また、本日ご出席の皆様方におかれましても、日頃より、より良い修学旅行の実施にご尽力頂いておりますことを、心より感謝申し上げます。

さて、本日の研究大会の主題は、「感性をはぐくむ修学旅行」とお聞きしております。昨今、全国的な都市化や核家族化によって家庭の教育力が低下するとともに、少子高齢化や情報通信技術の急速な進展に伴い、子供たちの日常生活において、実体験や感動体験、地域の大人との交流が少なくなっていると言われております。そこで学校教育においては体験的な活動を充実させることが、より一層重要視されるとともに、修学旅行は日常の学校生活では得ることの出来ない体験を子供たち同士が共有できる貴重な機会となります。子供たちが学校から離れた場所に行き、多くの人と出会い、身近な地域とは異なる風土や産業に直に触れることにより、豊かな感性が育まれることと思っております。このような研究大会の場で、学校関係者の皆様や観光業に携わる皆様が「感性をはぐくむ修学旅行」の実現に向け協議を重ねることは、大変有意義なことであると思っております。ぜひとも本日の研究大会が実りの多いものとなりますよう、ご期待申し上げます。

また、今回の研究大会では、被災地復興への継続的な支援が研究主題となっており、被災地への修学旅行を実施した福岡県の学校と、被災地からの修学旅行生を受け入れた愛媛県からの報告が行われると聞いております。東日本大震災と、これに伴い発生した福島第一・第二原子力発電所事故から3年が経過しましたが、文部科学省におきましても、現地の子供たちへの心のケアや就学支援などに、引き続き取り組んでいくとともに、私たちが震災から学び、教訓としていくための取り組みを考えているところでございます。政府は昨年6月に、我が国の教育振興に関する施策の総合的計画的な推進を図るため、「第2期教育振興基本計画」を閣議決定したところです。この中で未曾有の大震災を教訓として、例えば、困難に直面しようとも、諦めることなく状況を的確に捉え、自ら考え行動する力を、これからの子供たちに身につけさせなければいけないのではないか、ということ、これからの教育の一つの方向性として定めているところです。このような中、被災地復興のために継続的に

支援を行うことは、ますます重要なこととなっており、本大会の研究主題は、誠に時宜を得たものであると思っています。

被災地への修学旅行が、本日の貴重な実践研究など、現地の的確な情報に基づき、いち早く元通り実施されることを切に願います。

結びに、本研究大会のご盛会及び公益財団法人全国修学旅行研究協会の今後のますますのご発展とご参加の皆様方の一層のご健勝とご活躍を祈念して、挨拶とさせていただきます。

【 来賓挨拶 】



観光庁観光産業課
課長 石原 大

ただ今ご紹介いただきました観光庁観光産業課の石原と申します。本日の第 31 回全国修学旅行研究大会の開催、誠にありがとうございます。

はじめに、観光という側面から、世の中の状況を少しお話させていただきますと、新聞などでも報道されていますとおり、このところ、日本には外国人の方が非常に多く来られています。昨年は、初めて訪日外国人 1,000 万人を達成し、今年は 1,200 万人に届くようなペースで来ております。こうした訪日外国人数の伸びを見ますと、観光に対してはとてもいい風が吹いているように感じるわけですが、観光庁としては、国内の旅行、日本人の旅行も重要でありまして、これを底支えし、増やしていく必要があると考えております。

今後、日本の人口が徐々に減っていくことは、統計からも明らかであります。このため、少しでも多くの日本人に旅行に出て、いろいろな地域に出かけてもらい、流動人口を増やしていくことが非常に大切になってきます。

修学旅行は、子どもたちに旅の素晴らしさや面白さを感じさせ、見聞きし、触れ合ったものから刺激を与えられ、成長を実感できる貴重な機会であると考えております。昨今、若者の旅行離れが言われて久しいですが、ある調査によりますと、幼少期に家族旅行で楽しい経験をしていたり、遠足や修学旅行で楽しい経験をした子どもたちは、その後も旅をしているということがございます。スマートフォンやタブレットなどの IT 機器が発達して、家庭や学校の教室に居ながらにして、世界中の様々な情報が手に入れられるようになりました。その情報もビビッドになり、あたかもそこにいるような状態で勉強することができるようになっておりますが、やはり現地に出かけ、五感を使って学ぶということが小学生、中学生、高校生には必要だと思えます。修学旅行は基本的には学習の場ではありますが、観光庁としてはぜひ、旅の素晴らしさや楽しさも併せて感じてもらえるような修学旅行を作っていたければありがたいと思っております。

研究大会のサブタイトルに「被災地復興への継続的支援」とありますが、本日は、復興支援に関わるいろいろな取り組みをしている学校の事例が報告されると伺っています。現在、国内旅行全体は微増傾向にありますが、東北地方への旅行は回復していないというのが現実です。被災地への修学旅行は、保護者の方々にご理解頂くことが難しいなど、実現に向けては困難な面もあると思われませんが、得るもの、学べるものは多いのではないかと考えております。若い人たちが東北を訪れ、人々と触れ合うことで、被災地を元気づけることができ

と思いますので、ぜひとも前向きにご検討いただければ、大変嬉しく思います。

最後になりましたが、本日の研究大会が実りある、有意義なものになりますよう、心より願っております。本日は誠にありがとうございます。

【ご挨拶】



近畿日本ツーリスト株式会社
代表取締役専務 田ヶ原 聡

ただいまご紹介いただきました近畿日本ツーリストの田ヶ原です。

本日は「第31回全国修学旅行研究大会」がこのように盛大に開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

また、ご参加頂いております先生方や行政、自治体及び旅行関係の皆様方には、平素より弊社教育旅行担当者に多大なるご支援、ご協力賜りまして誠にありがとうございます。この場をお借りして御礼申し上げます。

先ほどご紹介にもございましたが、全国修学旅行研究協会を支える一會員の立場から、教育旅行に関して、一言申し上げたいと考えております。

この後の全修協提案におきまして、前理事長の中西先生からもお話しが出るかと存じますが、教育旅行において「安全・安心」を最重点に取り組みなければならないことは当然の事であり、東日本大震災以降、学校現場より危機管理体制がより強く要望されるようになりました。大事な生徒さんの生命をお預かりして実施をする旅行において、今まで以上の安全対策を講じていく必要性を強く感じております。

本日は生徒の皆さんの「安全」の確保と、先生方・保護者の方へ「安心」をご提供する弊社の具体的取り組みについてご紹介をさせていただきます。

私どもでは危機管理を「KNTゾーンディフェンス」体制と位置づけ全社で取組をしております。修学旅行中の不測の事態に対応できるよう、最寄支店の社員・現地エリア内に滞在している社員が組織的に対応できる仕組みです。緊急時に備え、エリアでの役割分担や機能的活動に関して共通手順を明確にし、迅速な対応ができるように、万全の備えをしております。また生徒の皆さんの無事をより確実にする為、100%全社員が救命救急講習を修了しており、先日もあるスポーツ大会で協力をいたしましたところ、消防庁より感謝状をいただきました。このように、万全の体制で緊急時の対応を致しております。

本年より弊社では、災害支援システム「CCRy(ククリ)」の販売を新たに開始致しました。「ククリ」は先生方の目が届かない生徒の皆さんの班別行動時の有事に、生徒の皆さんの位置確認ができ、スマートフォン上に最寄りの避難所の案内表示がでる仕組みです。インターネット回線を利用しているため、通常の携帯電話が不通の場合でも、先生方と生徒の皆さん

が直接に連絡取り合える、画期的なシステムです。

東日本大震災の際は、携帯電話やメールが不通となり、東京都内で班別行動をしていた修学旅行生の所在地や安否確認が全く取れず、学校や保護者の方に大変なご心配をおかけしました。「CCRy(ククリ)」は生徒の皆さんの「安全」と先生方・保護者の方に「安心」をご提供できる近畿日本ツーリストのオリジナルコンテンツです。

最後に、本日ご出席の皆様方へ日頃の弊社へのご支援、ご協力に改めて感謝を申し上げますと共に、生徒・学校・保護者の皆様へのますますの「安全・安心」をお届けし、教育効果のより高い修学旅行の実現のために微力ながら尽力してまいることをお約束させていただき、ご挨拶とさせていただきます。

本日は、誠にありがとうございました。

【全修協提案】



「修学旅行に何を求めるのか」

公益財団法人全国修学旅行研究協会
理事（前理事長） 中西 朗

日頃から、各方面での修学旅行実施へのご尽力に心から感謝申し上げます。私は、学校を離れて、久しくなっていましたので、独りよがりの感がありますが、一つの提案として、いま私の思っておりますことをお話しさせていただきます。

1 この頃考えさせられていること

○教育はどこに向かっているのでしょうか。

これから、学校教育はどちらを向いて展開されていくのか非常に不安でなりません。今、「グローバル社会における学校教育」という言葉が叫ばれています。このキーワードが「エコリテラシーの育成」だと教育調査研究所理事長の新井郁男氏が提言されておられます。エコリテラシーとは、「知識を受動的に受け取るだけでなく、他者や対象との相互関係の中で理解を深めていく力」ということのようなのです。これが、現在の混迷を極める社会を切り開いていく教育の姿となることを期待しております。

教育界では、口癖のように、「豊かな心」「確かな学力」と言われますが、言葉は踊っていても、身近な課題として子どもたち自身が、学習に取り組む方向を見出しているのでしょうか。そして、それに応える確固とした教育の姿を先生方が描いておられるのでしょうか。教育制度はますます多様化し、学習内容は量的にも増大し、複雑化していきます。また、テスト結果のみで学校が評価される時代です。次々と出される教育施策によって本当に学校教育が救われるのでしょうか。どうも、責任の所在をうんぬんするだけで、本質的な改善につながって行くとは考えられません。

○子どもたちはどんな状況の中で生きているのでしょうか。

このような状況の中で、学校教育の展開には、大変な努力が必要となっています。また、残念ながら、子どもたちは、多くの病理現象を抱えています。今は、家庭・学校・社会の現状の中では本当に生き抜きにくい状態ではないのでしょうか。人々はただじっと耐えて、黙々と生活するのが最善であるという感に追い込まれているのではないのでしょうか。

近年、社会を風靡してきたのが「個性化」という言葉です。私は、現代教育の最大の曲が

り角は、「個性化教育」だっただと思っています。「個性化教育」が悪いのではなく、「個性重視」という言葉によって、家庭・学校・社会の中で、人間を律していく心が失われてしまったことの問題です。自己主張が優先され、生活の中で自己を正していくことが希薄化してしまったのです。人間は、生活を共にする構成員のバランスの中で生きていくことが必要です。このことを怠ってはいけません。そこにこそ、本当の個性が尊重されるのだと思います。

○子どもたちはどんな状況の中で生きているのでしょうか。

このことを子どもの成長ということから考えてみますと、現状は、自己を取り巻く環境に順応するコミュニケーション能力が養われていないことが問題となります。京都大学大学院教授の乾敏郎先生は、「コミュニケーション機能」とおっしゃっておられます。能力という側面だけでなく、人間共通の脳の機能の成長として捉えておられます。この、コミュニケーション機能とは、「多くの人と接して、言語ばかりでなく、表現・表情・発声・行動などを通して、取り入れた各種の情報を総合して、相手の意図をくみ取りながら、自己を表現していく働き」と定義されています。子どもが成長の段階でこの過程を経ないと発達障害を起こすそうです。いじめも、不登校も、自閉的傾向もここに起因しているとも言えるのではないのでしょうか。多くの努力が払われている学校の病理現象も、子どもたちにこの機能が育っていかないと根本的な解決に至らないと思います。ですから、学校教育の力のみでは限界があります。家庭・学校・社会の全般にわたってコミュニケーションの改善と充実がなければなりません。

古来、日本人の特性として守られてきた「恥を知る」ことや「まわりへの心配り」を社会生活全般で取り戻したいものです。雨の日の「傘を傾ける」という言葉は、もう古語でしょうか。

2 学校のスリム化と修学旅行の提案

○学校を取り巻く多忙感から脱皮しよう。

このように、多くの課題を抱えている学校は、大変多忙です。しかし、私たちが多忙であるといくら自己主張しても、誰も聞いてはくれません。多忙であることはむしろ人間にとって生きがいでもあります。それが「多忙感」として心に定着してしまうと非常に危険な状態といえましょう。常に、生きがい、やりがいを持っていると、「多忙感」から脱出できます。

「教育愛」なんて素敵な言葉は陳腐化してしまったのでしょうか。今、先生になりたい人が不足しているそうです。現在の学校は、責任ばかりが優先されてしまって、教えることの楽しみが見出されないのではないのでしょうか。

文部科学省は、「世界一多忙」とされる日本の教員の勤務状況を改善するため、学校活動を担う外部人材を大幅に増量する方針を決めました。スクールソーシャルワーカー・部活動指導者・事務職員などを増員して、教員の負担を軽減し、授業に専念できる環境を整備し、学

力向上を図るとされています。

このことには、残念ながら大変な勘違いがあります。日本独特の学校教育は、子どもたちの育ちを総体的に捉えて、学習・生活・心情と深くかかわり合いながら展開していくというものです。例えば部活動も技術の向上が主体ではありません。部活動を通じて先生と子ども、子ども同士が互いに心を通じ合い、幅広い学びの向上を図ってきました。また、学校に来られる外部の方が増加すればするほど、その対応に却って忙しくなります。今学校は、何が「多忙感」をもたらしているかを分析し明確化することが必要です。

そして、文部科学省は、補助員の増加でなく教員定数そのものを増やすことに尽力されることを切望します。

○教育をスリムにして経営課題の重点化を図ることが必要です。

そして、学校は、教育の本質に立ち返って、教育をスリムにして、経営の重点化を図ることが必要です。

各学校では、年度当初に学校経営案が作られ、最近では保護者や地域の人たちにも配布されます。課題が列挙され、取り組む方向がきめ細かく書かれています。それは素晴らしいのです。しかし、この文書は、外部に対する学校教育の実践契約事項の提示だとしますと、これを一年で履行するのは、困難であると感じてしまいます。今年度の重点としてスリム化することが必要です。焦点を当てて、力を集中して取り組むことです。肥大化してしまった学校教育への注文を学校なりに整理することが必要なのではないのでしょうか。

東京農業大学客員教授の渡部邦雄氏は、教育の本質に立ち戻るために「学校の断捨離」として、思い切った整理の必要性をご提案されておられます。

○こんな中だからこそ、修学旅行を大切にしよう。

時代の流れの中で、当然の結果かもしれませんが、残念ながら、いま学校から会話が少なくなっています。職員室は、パソコン操作の場となり、先生方は、黙々とパソコンに向かっておられます。また、学級での話し合い活動、子どもと教師との語り合いなどの特別活動の時間も減少しています。特別活動を通して得た学校時代の思い出が何歳になっても語られるという素晴らしい姿は、これから影を潜めてしまうのでしょうか。

そんな中だからこそ、学校最後の思い出づくりとしての修学旅行は、成長の大きな節目でもあり、学校づくり・学級づくり・人間づくりの最高の場です。この行事を活用して、先に挙げました「コミュニケーション機能」の育成に役立ててください。それほどに、大切な行事であるという方向で捉えたいものです。しかし、現実的にはそのために活用できる時間の減少が憂慮されます。

3 修学旅行の危機管理を捉える（学校及び旅行関係者の取り組み）

○差し迫った危機に対する修学旅行実施の体制を組み立てよう。

とはいっても、修学旅行の実施には、あまりにも壮大な危機が予想されます。修学旅行は、不案内の地で、「出発から帰宅までの安全」を確保しなければなりません。しかも、災害がいつやってくるかわかりません。そのための万全の対策が必要です。

こまごまとしたマニュアルはお話しする時間がありませんが、まず、旅行先の組織、待機する校内の組織を立ち上げて、危機に備えるための課題整理と対応づくりが先決です。

修学旅行は、学校内の組織と連動しながら実施され、いざという時に大きな役割を果たします。例えば、生徒の安否確認は、出先より、学校と生徒の携帯電話連絡が大きく機能したという事例がありました。

旅行先では、教職員、添乗員、施設員等の役割分担を明確にして、いざという時に連動して働くことが必要です。たとえば、帰宅便の交渉など、旅行業者の献身的な力が大きかったという事例がありました。

○「想定外」を生き抜く社会対応力を身に付けよう。

災害には、「想定外」という言葉が多く聞かれました。今後も聞かれるかもしれません。しかし、この状況の中で、見事に安全を確保した子どもたちがいました。そこでは災害という不測の事態に対応するために、ハードの充実だけでなく「社会対応力」の強化がなされていました。この、「社会対応力」とはどんな力でしょうか。次の3点を捉えて日頃から養っておきたいものです。

☆「情報処理能力」(状況を多面的に捉えて、前向きに判断し、的確に実行する力です。すなわち「自分の身は自分で守る」ことです)

☆「精神適応力」(集団意識を把握し、信頼を持って助け合いに徹する力です。)

☆「対応習慣能力」(多くの知識が支えとなって、日ごろの訓練が行動の基礎となる力です。)

○最大の危機管理は「心のケア」です。

残念ながら、災害に遭遇した時、いつまでも消せないものが、傷ついた心の問題です。それを支える体制の確保に十分な配慮が必要です。これは、修学旅行のみでなく、私たちは危機管理として、常に、一人ひとりの子どもの心のケアが重要だと思っています。

拙いお話でしたが、時間になりましたので、子どもとともに創り上げる修学旅行のますますのご発展を期待して、終わりといたします。

ご静聴ありがとうございました。

【実践発表①】



「東北には人を変える場の力がある」

福岡県筑紫女学園中学・高等学校前校長
(福岡県立修猷館高等学校前校長)

中嶋 利昭

【はじめに】

こんにちは。筑紫女学園の前校長で、現在は田舎で農作業に従事しております中嶋と申します。色々な家庭の事情でこのような状況になっております。私は公立学校で39年間勤め、定年退職後、私学の筑紫女学園で2年間、中学・高校の校長として勤務してきました。先ほどご紹介いただきましたが、3年前に東日本大震災が起き、修猷館高校の校長として教育の場で何ができるかと悩みつつ、震災の10ヶ月後の翌年1月に研修旅行（修学旅行）として宮城県を訪問しました。その後、筑紫女学園では東北の被災地を、見に行くのではなく、自らできることをしようということで、ボランティア活動を提案して生徒と共に行きました。その2つの学校での取り組みを発表させていただきます。

震災が起きてから3年と5ヶ月が経とうとしているわけですが、この間に東北には10回ほど訪問しました。それまでに訪問したのはわずか1回、しかも観光旅行で東北のお祭りを見ただけなので、特に縁があったというわけではありません。しかし、教育者として大震災に対して「何ができるのか」という思いが非常に強くありました。そして生徒を被災地に連れて行く中で、生徒が劇的に変わっていく場面が何度もありました。「東北には人を変える場の力がある」というのを痛感しております。

【プロフィール】

最初に私のプロフィールを紹介させていただきます。
昭和50年に公立の数学の教員として採用されました。
修猷館とは長い縁がありまして、平成6年に修猷館の教諭として赴任し2年生の担任をしていました。その年度の2月中旬、長野への修学旅行が決まっていたのですが、直前の1月17日阪神大震災が起きました。新幹線を使っていた関係で今年の修学旅行は中止かと思っていまし

たが、旅行会社の尽力もあり、羽田まで飛行機を使用して、東京からバスで長野に行き、無事に修学旅行を終えることができました。その時は被災地（者）への思いが至らず、修学旅行に行けたという喜びだけで終わってしまったことが、後になって非常に大きな心のしこ

中嶋profile

- ◆昭和50(1975)年 福岡県公立高校数学教諭
- ◆修猷館高校
 - ・H6(1994)年～H10年 修猷館教諭(数学)
(H7.1.17.阪神大震災)
 - ・H10(1998)年～H14年 修猷館教頭
 - ・H18(2006)年～H22年 修猷館第27代館長
 - ・H22年度 福岡県教育庁理事
 - ・H23(2011)年～H24年 修猷館第29代館長
(平成24年3月末定年退職)
- ◆学校法人筑紫女学園
 - ・H24(2012)年～H26年 中学・高校校長

りのようなものとして残ってしまっていました。今回の震災でも16年前の阪神大震災の時と同じことをするのか、という思いが強くなりました。

修猷館は黒田藩の藩校として、今年230周年を迎えました。教育方針としては「世のため人のため、社会のリーダーを育てていく」というもので、広田弘毅元総理をはじめ、政財界に多くの諸先輩を輩出してきた学校でもあります。校訓そのものではありませんが「質朴剛健」「不羈独立」そして「自由闊達」を校風としております。生徒自身も「不羈独立」ということで、上から命令をさ

れることを非常に嫌います。その中で、修猷館高校の研修旅行は長野県でスキーをする予定だったのを、震災をきっかけに、宮城県に変更して実施しました。時系列で行きますと3月11日に震災が起き、6月11日に保護者説明会を行いました。実際に行ったのは1月5日から8日の3泊4日と非常に短い期間でした。宿泊先は宮城蔵王ロイヤルホテルでした。海岸沿いのホテルは、震災でホテルそのものが被災したのと、余震などの心配もありましたので、400人規模の生徒が泊まれるところとなるとスキー場のホテルしかなかったのです。予約をしていた長野のホテルを解約して宮城のホテルと契約することとなったので、信義上の問題もあつたりしてなかなか話が進まず、間に立った旅行会社も苦慮していたようでした。最後は多少押し切った部分もありましたが、契約上のトラブルもなく修学旅行を行うことが出来ました。詳細は私がずっと作成してきた修猷館のホームページ平成23年度「修猷の四季」に、自分の思いも併せて載せてきました。時間があればご覧ください。

福岡県立修猷館高校

- ◆黒田藩藩校として天明4年(1784年)創立され、今年で230周年を迎えている。
- ◆藩校時代にあつては藩の中樞を担う人材育成を、明治以降においては、政財界を含め国家社会を担うリーダー育成を教育の基本指針としてその役割を果たしてきた。(『世のため人のため』)
- ◆質朴剛健、不羈独立、自由闊達を校風としている。

【東北修学旅行が決まるまで】

説明会の度に生徒・保護者に訴えてきたのが「世のため人のため」ということです。この「世のため人のため」を実践するのが今、この場ではないのか。社会のリーダーとして、この国を担う覚悟を持たせたい。ある程度のリスクは考慮した上での行動も必要ではないのか、ということ伝えてきました。そして、何よりも行くことだけでも被災地への支援になることを訴えてきたのですが、先ほ

ど申しましたように「自由闊達」「不羈独立」の校風ですので、上から言われるのを何よりも嫌うわけです。そこで生徒の意見も聞かずに勝手に行き先を変えたということが、生徒たちの反対意見の一番の理由でした。(「長野への修学旅行も貴方達の意見じゃないでしょう?」と聞いてやりたかったのですが、火に油を注ぐようでは言えませんでした。)水面下で旅行業者と折衝をし、ホテル変更の期限から逆算して説明会、希望調査の日程を決めていく。PTAの役員さんに事前の理解を求めた上で、生徒たちへ結論だけを伝えざるを得ない、そ

・生徒説明会、保護者説明会は紛糾した。

【新えたこと】

- (1)「世のため、人のため」を実践する場
- (2)社会のリーダーとして、この国に担う覚悟を持たせたい
- (3)行くことだけでも支援になる

【及対論】

- (1)「勝手」に行き先を変更した
- (2)健康被害について
- (3)全員参加ではなく希望制

うすると生徒たちは寝耳に水となるわけです。そのことが原因で学校への信頼関係が崩れ、生徒間や職員間が割れ、学校が崩壊するのではないかというところまでになりました。

保護者の心配の多くは福島第一原発のことで、説明会をした6月11日の段階では原発事故も全く見通しが立っていない状況下でしたので、健康被害のことを強く訴えておりました。学校は「安全・安心」を第一に考えるもので、それを実行する場が修学旅行ではないのか？命を軽んじているのではないのか？長野を予定していた学校が四国に変更したり、沖縄に行き先を変更したりする中で、なぜ被災地の宮城県なのかと強く責められることもありました。自分としても悔しくてならなかったのですが、一旦行くと決めた以上、貫徹することが被災地への一番の支援だと考え、希望制にすることにしました。しかし、本当であれば全員で行けるはずだったのに、希望制にしたが故に全員で行けなくなった、中嶋館長の一言で楽しい思い出づくりが変わってしまったこと、この点にも生徒たちは反発しました。生徒だけでなく保護者からも「自由闊達」「不羈独立」の「不羈独立」は一体何なのか、200年を超える修猷の歴史に汚点を残すことになるのではないのか、責められるというよりは罵倒されました。そこで私も腹をくくりました。行き先を変えたお詫び、実行する覚悟、そして全員が無事に行って帰ってくることへの祈りとして、頭を丸めました。それ以来3年半、ずっとつるつる坊主にしています。とは言え、「坊主にしたくらいでは許さん！」という保護者の言葉もありました。

【生徒の意識の変化】

その時の生徒数は440名、うち参加したのが360名で約8割。2割は参加しませんでした。参加するかしないか、ということで、生徒はかなり葛藤しました。その葛藤も含めて、見守っていかねばならないと感じました。そして参加した360名のうちの2/3はスキーだけ、残りはスキーを1日、視察を1日としたのが40名、スキーをせずに被災地の視察と被災者との交流を選んだのが約80名でしたので、1/3が視察をしたということになります。行く前には、行く選択と行かないという選択をした生徒との間で、「余震も原発事故もあるのになんで行くの？」というような感情がぶつかっていたようでした。そして修学旅行の初日にも、スキーのみの選択をした生徒の雰囲気として、「蔵王まで来てスキーをしないなんてもったいない」という感じがありました。

しかし一日目の夜、生徒がそれぞれの活動報告を兼ねて討論会をしました。その討論会では今までの雰囲気は逆転しておりました。「東北まで来て被災地を自分の目で見ないなんて、なんて馬鹿だったんだろう」という意見が変わってきたのです。

また、私(校長)の責任でマスコミ対応をするということで、3日間のマスコミからの密着取材を受けました。河北新報、西日本新聞、共同通信とありましたが、後に思えば共同通



信の発信が大きかったように思います。世界中に配信されたことで、アメリカからも手紙やメール等をいただきました。

生徒たちの変化ですが、東北に行く以上は、自分たちで何かをしようという思いから、10月に生徒旅行委員会が発足しました。生徒が作成したしおりの表紙が「For Tohoku, For Japan」でした。私たち教師が、「国」とか「日本」といったことを意識させたことはあまりありません。ただ、「世のため人のため」というのは常々言い続けていましたし、震災後の日本をどうするのか君達若



者の肩にかかっている、と訴えてはいました。ですから、「東北のために、日本のために」というのが生徒の言葉として出てきたこと、そして集会時の掛け声が「動かせ、日本！」であったこと、さらにその掛け声も自分たちの不安をかき消そうとして自然に生まれたことばであること、そのように生徒の視野が大きく広がっていったことは嬉しい変化だと感じました。それでも旅行出発直前までは、学校内外が不穏な空気でありました。失敗は許されませんし、私自身も何かあったら福岡に戻ってくることはできない、という覚悟で臨みました。

しかし生徒たちは東北に入った瞬間から変化しました。マスコミの使い方もあったかとは思いますが、(学校のことだからと外部の目をシャットアウトせず) 途中経過も含めて報道されていくにつれて、学校を取り巻く雰囲気も変わっていきました。

旅行に参加した生徒が卒業時に校誌に寄せた文書の一部を紹介致します。「行く前には被災地は見世物じゃないと叩かれていたが、世の高校生、将来の日本を担う若者全てに必要な経験であるとさえ感じた。見るべきなのだ、聞くべきなのだ、知るべきなのだ。知ろうとしなければ何もわからない。」という文章を残してくれました。この生徒は一日がスキー、一日が被災地視察をした生徒です。教育者である以上、教育の果たすべき役割とは何かというのはいつも考えることです。私は教育基本法の中にある「平和的な国家及び社会の形成者」というものを、常に意識してきました。この、「国家及び社会の形成者」を育てていくために、そして教育の目標として掲げられている「我が国と郷土を愛する」気持ちを育てるために、この東北の地を使うべきだと考えています。偉人伝などを使って道德教育をするのも良いことではありますが、自然に「For Tohoku, For Japan」や「動かせ、日本」が出てくるような心を育てるために、3年前にはもう戻ることのできない東北地方を、生きた教材とすべきではないかと思います。これについては批判もあるかもしれません。

資料の写真は頂きものですが、南三陸町の震災直後の写真です。次の資料は南三陸町の防災庁舎の写真です。これも頂いたものです。被災地に入って実際に見れば自然の猛威に対して人間の無力さ、非力さが分かります。それでも東北の方々は本当に我慢強く、必死にこらえて笑顔で迎えてくれました。生徒たちは、破壊尽くされた状況を見る中でこれから日本がどうなってしまうのかという不安と共に、逞しく生きている人たちの姿を通しての未来

への希望を見出していったように思えました。そしてそれこそが東北が人を変えていく大きな力になっていっているのではないかと考えています。

今では震災から3年半が経ってしまっていて、震災直後の風景は残っていないところもありますが、震災を意識すれば、人を思い、日本という国を思う場になると確信をしています。

【筑紫女学園について】

次に筑紫女学園での活動です。筑紫女学園は大変大きな学校です。女子校ですので、女生徒ばかり2,000名以上が在籍しています。明治40年に創立、今年で108年目を迎える学校です。中学生が約600名、高校生が約1,500名で、約2,000名以上、そして先生も130名程です。130人ですから多種多様です。2年間よくぶつかりました。仏教系の学校で、「自律・和平・感恩」を校訓としています。それぞれ「自律（自己への目覚め）・和平（他者への目覚め）・感恩（生命への目覚め）」ということになりますが、被災地に行ったときに痛感する言葉でもあります。自分自身を意識しながら、他者への労り・他者の命を大切にしていって、そして今、生きていることを感謝の思いでもう一度周りを見てみよう、と思えるのです。



【視察の様子】

修猷館での経験もありましたので、筑紫女学園に着任後すぐに、秋休みを使って希望制で東北に行きましょう、となりました。2泊3日で福岡→仙台の直行便を使用するため、機材の関係で50名という制限がありました。行き先は南三陸町としました。何かかといいますと、資料の写真を御覧ください。これが南三陸町の写真です。ここに「ホテル観洋」が写っているのですが、私はぜひこのホテルに生徒たちを泊ませたい、ここで何か経験させたい、という思いがとても強くありました。資料の写真を見ていただくとわかると思いますが、震災前ののどかな港町だった南三陸町が、震災でほぼホテルだけしか残っていない状態にまでなったのです。この「ホテル観洋」は震災直後の避難所、さらには復興の拠点としても利用されました。1,400名が宿泊でき、高台にあって津波の被害も1階までで大きな被害は無かったそうです。被災地の傍に建つこのホテルで、生徒たちにも何かを経験させたいと考えのです。



次の写真は防災庁舎です。この建物も解体するかしないかで、だいぶ議論がなされてい

たようです。現在どうなっているかはわからないのですが、昨年の12月には、まだ残っていました。次の写真はホテル観洋の女将さんの写真です。このときの女将さんの言葉は、私達の心をほぐしてくれるものでした。生徒たちは皆、震災を学びの場とすることに戸惑っていたのですが、葛藤する生徒たちに対して、女将さんは「千年に一度の大震災は、千年に一度の学びの場です。しっかり見て、聞いて、そしてそれを伝えてほしい。それが東北の人々の願いなのです。」と言ってくれました。この時のボランティア活動としては、あさひ幼稚園での園児との交流や、被災家屋の瓦礫の分別処理でした。やはり体を動かし汗をかくことはとても大事なことだと思いました。



次の写真は門脇小学校です。こちらも現在取り壊し中とのことです。他にも石巻の瓦礫の山の写真もありますが、このときはまだ残っていましたが、昨年行った時には更地になっていました。次が空港の近くの閑上地区の写真です。本当に何も無い、一面の野原が広がっている状態ですが、かつてここには住宅が密集していました。このように、震災前の状態を一切想像できない光景が続いているのです。



一方で翌年の8月に、フラガール甲子園が福島県いわき市で行われたのですが、そちらに参加致しました。こちらも参加生徒を募ったところ、8名の生徒が手を挙げてくれました。ただ行って、踊って終わるのではなく、行く前に実際の被災地をきちんと見てもらうために介護施設や仮設住宅を訪問しました。最初に訪問したのは老人介護施設で、その後が仮設住宅だったのですが、この仮設住宅を訪問したときは雨のせいもあったのかもしれませんが、地元の方々の握手した手が温かく、その温かさに生徒たちのほうが感激し、大粒の涙を流して、一生懸命握り返していました。翌日は被災地の訪問で、4月に立ち入り禁止区域の指定が解除された広野町を訪れました。ここは宮城県・岩手県とはまた少し違った風景がありました。傍から見ていふには、家も大きな被害にあっているようには見えませんが、普通の田舎の風景と見えるところですが、生き物さらには人の姿もないのです。片付いてもいませんし、本当に何も無い、という印象を受けました。見えるのは黒い除染作業の廃棄物だけ、というこの光景が福島の実状なのだと思うと、



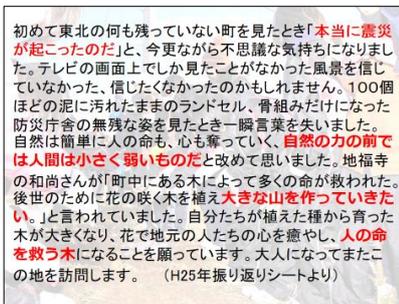
改めて福島の被害の深刻さが見えてくるような気がしました。生徒たちも、その光景から何かを見ようと一生懸命でした。

【被災地修学旅行】

そして平成 25 年の 12 月には筑紫女学園として、宮城県へ修学旅行に行きました。公立学校の修学旅行は金額の上限があり、それを超えることはできませんが、筑紫女学園は私立学校ですので、お金に関する制限はございません。日程もお金も、保護者の方に納得していただければどうとでもできる、というところがあります。筑紫女学園の場合には以前から、複数のコースを設けて、生徒の興味関心に基づいて選択するようにしています。

この時は、一学年 450 名程が、5 つのコースから選ぶことになりました。一番多かったのはシンガポールコースで約半数の生徒が選択しました。その次が東北・関東コースでした。このコースは東北でボランティアをすると伝えていたのですが、それほど的人数は集まらないだろうと考えていたのですが、予想に反して多く、74 名の応募がありました。実はこれは私としても想定外のことで、この人数で何をしたら良いのか、悩んだところでもありました。(来年度 (H26) は東北・関東コースが約 2 倍になって 150 名が選択しています。)

ボランティア活動は南三陸町で実施したかったのですが、12 月中旬という時期も良くない上に人数が多かったこともあって活動先がなかなか見つからず直前までヤキモキしました。最終的には少し遠くになりましたが気仙沼の階上地区にある地福寺の和尚さんと御縁がございましたので、地福寺で植樹と菜の花の種まきをしてきました。修猷館のときもそうでしたが、「研修旅行」と銘打っている以上は、何かしら自分の生き方にかかわるような旅行にしていきたいという思いから、必ず「ふりかえりシート」というものを書かせていました。そしてふりかえりシートなどを纏めて一冊の本にしました。ご覧いただければお分かりかと思いますが、生徒たちはこのふりかえりシートを実によく書きます。生徒の想いが言葉になって溢れてくるのが見えてきます。



初めて東北の何も残っていない町を見たとき「本当に震災が起こったのだ」と、今更ながら不思議な気持ちになりました。テレビの画面上でしか見たことがなかった風景を信じていなかった、信じてなかったのかもしれない。100個ほどの泥に汚れたままのランドセル、骨組みだけになった防災庁舎の無残な姿を見たとき一瞬言葉を失いました。自然は簡単に人の命も、心も奪っていく、自然の力の前では人間は小さく弱いものだを改めて思いました。地福寺の和尚さんが「町中にある木によって多くの命が救われた。後世のために花の咲く木を植え大きな山を作っていた」と言われていました。自分たちが植えた種から育った木が大きくなり、花で地元の人たちの心を癒やし、人の命を救う木になることを願っています。大人になってまたこの地を訪問します。(H25年振り返りシートより)

このふりかえりシートは出発時に空港で配布して、帰りの空港で回収することを伝えていました。ですので、生徒たちはホテル内やバスの車内、さらには帰りの飛行機内で一生懸命書いていました。

一人の生徒の変化を紹介します。実施前に、この東北コースを選んだ理由を書かせたところ、「将来留学をするために東北を見ておこうと思った」というような内容のことを箇条書きで書いてきて、正直なところ不安にもさせられました。担任も、成績のことも含めてコース変更を促したほうが良いと考えたほどでしたが、東北で何か変わるはずだと信じて連れて行きました。すると帰ってきた後のふりかえりシートを見て驚きました。どのページも文字でビッシリ埋まっている状態で、一週間後にはノートに書き足りなかったぶんを書いて持ってきました。行く前の段階では、この生徒は文章を書くことができないのではないかと

と疑う程だったので、訊いてみたところ、その生徒自身も「自分がここまで書けるようになるとは思わなかった」「実際に東北に行って、見た途端、何か自分自身の中の閉ざしていた部分がほぐれていくように感じた」と言ってくれました。

これは昨年のふりかえりシートの中の文章です。気仙沼の地福寺は海岸から3～400mは離れている場所で、海岸がよく見えました。しかし地福寺の和尚さんが、かつては海岸にはたくさんの木が植わっていて、ここからは海が見えなかったと教えてくれました。しかし震災と、その後の津波で多くの木が流されてしまったこと、それでも残った木によって多くの人が助けられた。だから自分たちは今、ここに再び木を植えて、後生の人の命を救いたいのだ、とおっしゃっていました。椿の樹を植えれば花が咲き、人々を楽しませ、その樹が大きくなっていつかまた人の命を救う樹になってほしいという願い、そして椿の樹を植えることで、この東北の地を再び訪問するためのきっかけになってほしいという願いも込められています。



【ディズニーと震災学習】

一昨年度のふりかえりシートで、色々な光景を見ると悲しくてやるせない気持ちになるが、自分たちが悲観してはダメだと言うこと、そして東北がとても素敵なおとところだと書いてありました。そして「これは東北の『人』が素敵だからで、その人達と触れ合うことで自分の中の何かが変わっていくのを感じました」と書かれています。

他にも、東北・関東修学旅行の日程表ですが、最終の関東はディズニーランドとしましたが、もともと関東コースだったところを、強引に東北をくっつけたためにこうなっていました。この行程はだいぶギャップがあるのではないかと周りからも指摘をされ、東北から関東に入った4日目の午前中はディズニー・キャンパスを入れました。このキャンパスを取り入れたのは、震災時にディズニーが取った対応や奉仕活動、危機管理の体制などを語って欲しいと考えたからなのですが、期待とはかけ離れたものでありました。関係者の方が聞いたら怒るかもしれませんが、正直な感想を申し上げますと、勿体無かったとも感じました。金銭的な面もありますが、何より一方的に自分たちの論理を語るだけの姿勢でしたので、もう少し、ディズニーの震災時の話を聞く意図を汲み取って欲しいとも感じる内容でした。生徒たちにも申し訳ないことをしたと思っていたのですが、後でふりかえりシートを読んだところ、生徒たちの評判はとても良かったのに驚かされました。中には「このディズニー・キャンパスで東北の被災地とディズニーが繋がった」と書いてあるものもありました。他にも、ディズニーランドの中でも、た

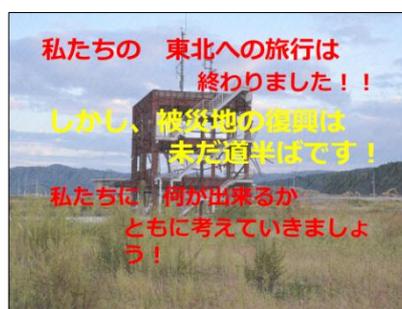
平成25年度 筑紫女学園高校修学旅行	
本校の修学旅行は複数コースを設け、自らの興味関心に基づき選択をするようにしている。	
(1) 日程	平成25年12月14日(土)～12月18日(水) 4泊5日(ハワイコースは4泊6日)
(2) コース	生徒数は約450名
① 東北・関東コース	参加生徒数74名、引率教員3名
② 関西コース	参加生徒数46名、引率教員3名
③ 北海道コース	参加生徒数62名、引率教員3名
④ ハワイコース	参加生徒数41名、引率教員3名
⑤ シンガポールコース	参加生徒数220名、引率教員9名

だ楽しむだけではなくて、スタッフがどういう気持ちで働いているのかが素直に入ってきました、と多くの生徒が書いていて、大人の自分とは違う目線で見ていることを強く感じました。とは言え、正直、もう少し工夫が欲しかったのは事実です。

行程のディズニーについては賛否両論があるかと思いますが。2泊3日で帰ろうと思えば帰れないことも無いのですが、他のコースが4泊5日取っているので、合わせざるをえないところでもあります。

【東北修学旅行の目的】

配布した資料の33ページを御覧ください。先ほど、東北を選んだ生徒が意外と多かったことをお伝えいたしました。この生徒たちの半分以上はディズニーを期待して選んでいな、とも感じました。最初の東北は我慢して、最後のディズニーで楽しもうとしている生徒が多いのだろうと思っていたところ、案の定、そのことを書いている生徒がいました。2日目の夜に、自分たちが東北の被災地で何を考えたのかを、生徒同士で話し合わせました。その時に、東北の為に何かできることがないか、と考えている生徒がいた事に、この生徒は驚いた、とあります。



「私は東京に行きたくて、このコースを選びました。周りの人も同じだと思っていました。東北での2日間を乗り越えれば東京に行ける、と出発前には思っていました」とあります。多くの生徒達がこの気持ちを持っていたのではないかと思います。しかし実際に行ってみれば、「自分が恥ずかしくなりました」と正直に書いていて、私も嬉しく思いました。被災地に行ってみれば、気持ちが変わり、自分のものの見方や考えかたが大きく変わること、そして他人の話をきちんと聞いて、見て、感じて自分の中に取り込んでいったことで劇的に変化していく生徒たちの姿を見ることができるのは、東北の地ならではのものです。

被災地はまだまだ復興の途中で、毎年大きく変わりつつあります。石巻の瓦礫の山が、翌年には更地になっていたり、防災庁舎も取り壊しになるのであろうと思います。しかし、東北は、そこで自分に何ができるのかを考え、それまでの自分の生活を見直す時間や場となります。修学旅行の目的とはそういった場をもつことではないかと考えています。ただの思い出作りだけが修学旅行ではありません。東北に行った生徒たちが今後、どのような生き方を選ぶかは、まだわかりません。しかし、私はその生徒たちを今後とも見守っていかなければならないと思っています。



生徒たちが変わっていく場面に出会える、これこそが「教育」であるとの歳になって強く感じています。「東北」との出会いで私も大きく変わりました。感謝の思いでいっぱい

です。

一日も早い被災地の復興を祈念し私の発表を終わりに致します。ご静聴ありがとうございました。

【実践発表②】



「被災地学校修学旅行支援事業」

愛媛県経済労働部しまのわ 2014 推進監

佐伯 登志男

【はじめに】

ご紹介をいただきました愛媛県庁の「しまのわ 2014 推進監」の佐伯と申します。行政で「2014」という職名をもらっていて少しおかしな気分もしています。今回、この様な発表の場を頂きましたので、この後の講演にも関わってくるのですが、少しでも仕事の PR もさせていただきたいと思えます。お手元の資料に「しまのわ 2014」の簡単なリーフレットをお配りしております。これは瀬戸内海国立公園の指定 80 周年ということもありまして瀬戸内海を挟んで向かいの広島県と愛媛県が合同で 3 月から 10 月 26 日まで開いている観光のイベントであります。特にパビリオンを作るようなものではなく、住民の方々の日常を「おもてなし」として、体験型のプログラムを作ってお客さんを少しでも瀬戸内海に呼び込みたいというイベントであります。その「しまのわ 2014 推進監」という肩書は 10 月 26 日に終わりそうな気もするのですが、観光物産課長も兼務しておりまして、そちらは 4 年目になります。今回の発表は観光物産課長として発表させていただければと思えます。

今日は、23 年度から 3 ヶ年取り組んだ被災地学校修学旅行支援事業についてお話したいと思えます。画面の右側におりますのが「みきゃん」というキャラクターで「きゃん」は possible「Can」という意味もあります。ゆるキャラグランプリにもエントリー致しましたので、ぜひワンクリックいただければと思えます。

【被災地支援事業発足のきっかけ】

この被災地修学旅行支援事業は、3 年半前の東日本大震災の後に、宮城県の高校生がテレビの中で「今年修学旅行だったけれど、学校から中止すると言われました。」と気丈に受け答えをしていたのを、当愛媛県の中村知事が見て、それだったら愛媛県が招待しよう、という発想で私たち県職員に持ちかけたのが最初でした。御多分にもれず、愛媛県も財政状況は良いわけではありませんので、この事業は県民の方々に呼びかけてみよう、となりました。愛媛県ではこんなことができるかもしれんよ、ということで、募金を呼びかけました。当初は 1 億円くらい集まれば、修学旅行生を何校か招待できるかな、という予定でした。しかし実際には 3 ヶ月あまりで 2

えひめ愛顔の助け合い基金①



愛媛県知事
中村 尚広

・震災後、TVのニュースで、東北の高校生が「楽しみにしていた修学旅行は諦めます。」と笑顔で(気丈に)、インタビューに答えていたのを見たのが、きっかけ



・県内市町長、団体・企業等へ協力の呼び掛け→快諾を得る

億円が集まりました。お手元の資料に事業内容と三ヶ年度の金額がありますが、2億円を超えております。次の資料に修学旅行生を招待した表がございますが、岩手・宮城・福島の3県から、3ヶ年で2,315名の修学旅行生を招待いたしました。

この募金は、修学旅行として募ったわけではなく、災害ボランティアの派遣や被災地への愛媛県特産みかんジュースの提供など、愛媛県独自の様々な活動に活用する目的で呼びかけたものでございます。皆様も被災地の支援は多少なりともされたかとは思いますが、正直なところ、愛媛県から送った支援が実際に被災地でどのように活用されているのかがわからない、ということもあり

ました。その中で、この被災地学校修学旅行支援事業は、当初1億円の目標だったところが、事業内容を見た県民の方々から沢山の支持を頂きまして、2億円を超えて更に増えていったような状況でございました。そして2,315名が来県することとなりました。

えひめ愛顔の助け合い基金③
☆被災地学校修学旅行支援事業
・平成23～25年度の3か年で
3県から計23校、のべ2,300人が来県
・しまなみ海道でのサイクリングや潮流体験、
砥部焼やみかん狩り体験など、本県ならではの
体験学習に加え、**来県するすべての学校に、県内校との交流を提案(全校が実施)。**
・本県の高校生にとっても、**人を支えることの尊
さを学ぶ貴重な機会**になることを期待

【支援事業について】

私達がどういった活動をしていたかを簡単に説明します。私は企画から実施計画まですべてに携わって来ましたが、震災後2ヶ月くらいから岩手県・宮城県・福島県の教育委員会に出向いて説明を行ってきました。震災後2ヶ月ですから、まだ周囲は瓦礫の山があるような状況でした。その中で愛媛県では支援事業をやりたいということをお話しました。すでに修学旅行を諦めていた学校もございました。また、保護者の方から「何とかならないか」と言われている学校も多数ありました。資料にあるのが、初年度の支援校です。私達は、実際に学校と教育委員会に行き、「決まっているところを強引に変更しようというつもりはありません。中止になってしまった、または中止を検討している学校を、愛媛県が招待します。」というふうに話をしてきました。中でも、愛媛県が用意した色々な体験プログラムについてはかなり説明をしました。道後温泉などもありますので、本当に色々なプログラムがあるのですが、希望が多かったのは何と言っても「みかん狩り」でした。愛媛県に行くのだったら絶対にみかん狩りがしたい、ということで、すべての学校がみかん狩りをしました。正直なところ、我々にとってみかんは通学路の途中にあって、時には捨ててあるような土地柄でしたので、高校生にとって体験プログラムになるということを実感したような状態でした。

このような愛媛県ならではの体験ともう一つ、県知事が、愛媛を訪れるすべての学校に「これだけは絶対に体験して貰いたい」としたものが、愛媛県内の学校との交流を呼びかけることでした。学校交流の経費も、招待事業としてこちらでやります、ということで話をしたところ、23校2,315名全員が、愛媛県内の学校と交流を持つことになりました。資料にもありますが、一番最初の学校が、町長まで亡くなった岩手県大槌町の大槌高校で10月でした。交流先の学校は2つありますが、三島高校は書道甲子園で有名になった学校です。映画にもなりましたが、紙の町であることを活かして、大きな紙に字を書くパフォーマンスをやっ

ているところです。毎年書道甲子園を開催しているのですが、そこで一緒に書道をしませんか、というようなプログラムを作りました。思い出すと今でも涙が出てきてしまうのですが、そういう交流もありました。

招待事業としては、行き先を変更してまで来るといことはありませんでしたが、旅行会社や保護者と相談して変更を検討したところもあったようです。

【被災地学校における修学旅行の重要性】

資料をご覧いただければわかるかと思いますが、東北から愛媛というのはとても遠いところです。各県、修学旅行の経費の上限などもあり、いくら愛媛県が招聘するとしてもその辺りは大切にしたい、という保護者等の意向もありましたので、岩手県は他の宮城県・福島県と比べて少なくなっています。また、見ていただくとわかる通り、福島県は震災の影響が長引いています。3年目くらいには、招待事業の修学旅行で初めて全学年が集合しました、というような学校も出てまいりました。

このような形で、学校交流なども提案をさせていただきましたが、この事業については、本県の高校生にとっても人を支えることの尊さを学ぶ貴重な機会となることを期待していたわけですが、実際にそうなったことを実感しています。

最初に戻りますと、私自身は観光の行政セクションにありますが、愛媛県で招待事業をする際にも県民の方々から理解を得られないこともありました。修学旅行は保護者との議論や学校現場、そして教育旅行の事業者とが企画をして成り立っているのです、初年度の開催にあたっては学校にだけアプローチしてもなかなか反応はありませんでした。我々は教育委員会にも話をしましたが、それはたまたま私達が修学旅行の体験プログラムを作っていたという素地があってこそそのものだと思っています。そういったこともあって、迅速に対応しなければならないと感じました。この呼びかけ自体も、保護者会などでの決定事項を尊重した上で、最終的には旅行会社が実施運営を担うということとなりました。実際に補助金も、学校に直接補助を出すのではなく、実際には金額に上限などの制約はあるのですが、請け負った旅行事業者が愛媛県に費用を請求する、という形を取りました。

招待事業を行うなかで、強く感じたのは、先ほどの中嶋先生のお話にもありましたが「なんで愛媛県なの？」という疑問でした。アンケートの中でも、本当であれば東京だったり大阪で USJ に行ったり、という予定の中でなぜ愛媛県なのか？という疑問もあったけれど、学校交流などを通して、修学旅行先が愛媛県である理由がわかりました、というものがありました。

この事業が愛媛県の予算だと県議会で承認を貰うなどの手続きが必要ですが、皆さんの募金、浄財でなおかつ用途がはっきりとしたお金でしたので、招待事業に集中して投資することが出来ました。しかし、愛媛県一県での修学旅行のみ、などの制限を設けておりませんので、帰りに京都や大阪 USJ に行くための代金については負担をお願い致しました。

【愛媛県のメリット】

先ほどのリーフレットに戻りますが、地図になっているので御覧ください。関東であれば平和学習などもあって広島までは来るとも思います。この「しまのわ 2014」という企画も、愛媛県の松山市が広島から船で 1 時間程ですので、広島での平和学習修学旅行と併せて、体験プログラムなどを提案したいという知事の思いからできたものであります。ぜひここにいる旅行業者さんにも提案をお願いしたいところでもあります。もともと知事が松山市長だったこともあって、広島平和学習&松山という提案を積極的にやっております。

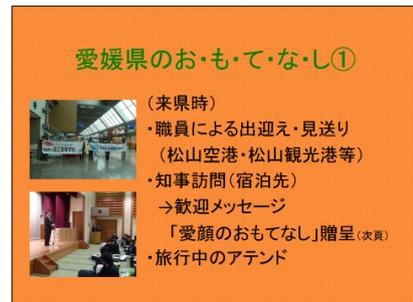
【愛媛のおもてなし】

次の資料ですが、今回の被災地学校修学旅行のときのおもてなしの一つとして、空港で横断幕でお迎えをして、最後に握手で見送るような、出迎え・見送りのおもてなしを致しました。横断幕右手にるのが航空会社さんで、こちらにも必ず来ていただいたような状況でした。次の写真は、知事が宿で夕食の時間に歓迎メッセージを、可能な限り知事本人が伝えるようにしておりました。県庁に来るプログラムがある場合は県庁で直接メッセージを伝えました。その時の写真です。宿の場合は、報道機関などをすべてシャットアウトしておりましたので、知事は 100%自分の気持ちだけで、30 人くらいの修学旅行生の前に来て、想いを伝えていた、という状況でした。生徒さんも大変驚いた様子でした。我々職員は、それ以外にも先回りしてのアテンドなども行ってまいりました。松山市はこの被災地学校修学旅行のアテンドや見送り、体験プログラムなど、ほぼ全てに参加しております。愛媛県としても、県全体でこのおもてなしをさせて頂いております。

更に集まった募金以上に、企業からの協力の申し出も多数ありました。中でも愛媛飲料さんからはポンジューズを提供したいという申し出がありましたので、愛媛の都市伝説として有名な「蛇口からみかんジュース」を作ったところ、行列ができて、わいわいととても楽しそうにしていました。

また、夏目漱石の小説「坊っちゃん」にもありますが、松山市は路面電車が走っています。私も初めて知ったのですが、東北には路面電車が無いのだそうです。路面電車も、伊予鉄道さんの協力で生徒手帳を見せるだけで無料としてくれました。更に、交流している県内の高校も対象としてくれました。みかんや今治のタオルなども、銀行がわざわざ数を揃えて作って寄贈してくれました。

また、3 年くらい前の松山市が舞台になった NHK ドラマ「坂の上の雲」で、乃木大将の



奥さん役をやった真野響子さんからも「何かお役に立てることはないですか」と連絡を頂きまして、みかんジュースのプレゼントをさせていただきました。

【学校交流がもたらしたもの】

今回の被災地支援事業の成果として、被災地に行くのもあるとは思いますが、学校交流が大きかったと考えています。3ヶ年で2億円あまりの予算はすべて使い切ってしまったので、今年度はこの招待事業はございません。しかし修学旅行の後も、小規模ですが交流は続いております。資料にもありますが、福島県立双葉高等学校が、愛媛県の八幡浜高校と交流をしたあと、八幡浜高校の部活動が双葉高校を訪れる、というような活動も続いています。また、浪江高校と新居浜商業高校は初年度に交流をしましたが、その後、生徒会が浪江高校へ行くなどの交流がありました。昨年の1月に浪江高校が自分たちで計画をして、直前に新居浜商業高校から浪江高校が来るという連絡が入ったことがありました。浪江高校は、皆さまも御存知の通り町がありません。生徒も4箇所くらいに分散しているような状態で、小規模な学校でもあったので、今回の基金の残りで招待しました。浪江高校からはいらないと言われたのですが、ぜひに、ということで招待致しました。このような交流が、支援事業が終わった後も続いています。新居浜市は一つが約3.5tある太鼓台という神輿で有名なのですが、100人以上で担ぐような神輿を、交流事業を知った学校周辺の住民の方が交流の際に持ってきたのです。学校だけではなく、地域の方々との交流も続いているのだ、と感じました。そして浪江高校と新居浜商業高校は、一緒になって太鼓台を担いだ後、太鼓台の上に乗って記念写真を撮ったときの写真です。太鼓台の上にいるのが浪江高校の生徒です。

また、学校交流については、修学旅行の時は、校長先生や担当の先生から教育委員会にも「どんな交流をすればいいのか」という問い合わせが沢山来ました。こちらからは「学校の自由で構いません」といつもお返ししていたのですが、一つだけ、「先生方は口を挟まないで、生徒同士で交流をさせて下さい」ということを伝えておりました。ですので、結果として、学校交流は生徒同士の手で作られていったものと考えています。

事業の成果
①学校交流の継続

☆修学旅行後も、学校交流が継続

- ・福島県立双葉高校＝愛媛県立八幡浜高校
→H23、24年度交流実施
→H25.8 八幡浜高校写真部が双葉高校訪問
- ・福島県立浪江高校＝愛媛県立新居浜商業高校
→H23年度交流実施
→H25.7 新居浜商高生徒会が浪江高校訪問
→H26.1 浪江高校が修学旅行で再訪 など



は学校で持ちますよ、と言ってくれました。そして後の交流は生徒たちに任せて、写真にある通り、東北高校から震災時の体験発表をしてもらいました。これは今後予想される東南海地震のことも含めて、我々の体験を愛媛の高校生に伝えたい、という東北高校からのリクエストでした。

【最後に】

最後になりますが、一つだけ申し上げておきたいと思います。なぜこのような事業ができたのかを考えるとまず、愛媛の学校は5月、6月、または夏休みに修学旅行に行く学校が多いのですが、東北の学校は11月頃に実施するところがほとんどということでした。ですので、みかんが一番美味しい時期にあたったというのもあると思っています。また、初年度は大変忙しく、被災地の学校が修学旅行を諦めてしまう前に、話を進めていく必要がありました。冒頭でも申し上げましたが、被災地に行くととにかく話をして、愛媛に戻ってから各学校の希望にそった学校を探す、という方法でして、教育委員会の協力も大きかったと思っています。そして何より、この事業が県の一般予算ではなく、県民の浄財で、なおかつ、目的に沿った事業であったことで県民の理解を頂くことができ、県民総出の受け入れ・おもてなしに繋がったと考えています。

以上で、私がこの3ヶ年担当した愛媛県の被災地学校修学旅行支援事業についての事例発表を終わりにしたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

【講演】



「修学旅行の思い出と防災」

語り部・かたりすと、元NHKキャスター
大阪芸術大学教授、防災検定協会理事長
平野 啓子

【はじめに】

皆さん、ただいまご紹介を頂きました平野啓子と申します。こんにちは。今日はもう長い時間ずっと続けていらして、最後に私の話をお聴きいただくということで、本当にしっかりやらねばと、身が引き締まる思いでございます。今日、なぜわたくしが、色々な体験を乗り越えて、現場を熟知されている皆様方の前に立たせて頂いているかといいますと、現在、防災検定協会という団体で役目を頂いております、その役員の方の中に、全国修学旅行研究協会理事長の岩瀬先生がいらっしゃるのです。岩瀬先生には日頃から防災と学校のことについて、様々なご指導をいただいているのですが、そんなことから直接お声を掛けていただきまして、本日、わたくしはここに参らせて頂きました。初めに、防災検定協会がどのような協会であるかを簡単にご説明いたしましょう。

ぜひこの機会に防災検定協会に興味を持っていただきたいのですが、ただし検定料が欲しいがために来たわけではありません。入り口にパンフレットを置いてありますので、お持ち帰りいただければ、守るべき命がより守られるためのものということをご理解いただくと断言できますので、ぜひお持ち帰り下さい。また、パンフレットの後ろの役員一覧には、岩瀬先生のお名前もありますので、ぜひ御覧ください。

【防災検定協会の成り立ち】

東日本大震災の後「自分たちの力で何かできないか」「このようなことが二度と起こらないために、何かいい仕組みが作れないか」と誰もが考えたことでしょう。学校の先生方も、学校の中で何かができないか、ときっと考えられたはずです。直後に立ち上がった文部科学省の安全安心の部会（学校安全部会）に入って、次々に色々な人のご発言を聞いてみたところ、みんなの「何かをやらねば」という気持ちが合致いたしました。そして、報告書の中に「学校教育の中にも、防災教育が必要である」という意味の文言が入り、閣議決定までなされました。ところが、教育の現場はお忙しいですし、何と言っても学校は学問を教える場であるということも重々承知しております。わたくしの本業は後ほど申し上げますが、私にとりまして、もし国語の授業で文学を読む時間を一時間減らされて、他に使われるとなると、少し悩むところが出てきます。他に教えなくてはいけないカリキュラムも沢山あることでしょうし、何より防災について教える先生方が、まずどこでそのための知識や教え方を会得

するのか、教え方にも不安があることでしょう。そういった事情もあることから、学校の中の防災教育というものが、なかなか進まない実態があることが分かりました。

そこで、学校でも行政でもない、志を同じくした人たちが集まって何か対策を考えようと、話し合いが行われました。その中には、防災の世界でも大変有名で、NHKで災害についての解説委員をされていた伊藤和明先生もいらっしゃいます。わたくしは、その伊藤先生に是非にお声を掛けられて、話し合いの場に参加致しました。そしてその話し合いの場で、「私達に何ができるのか」ということを、ずっと考えてまいりました。その結果、まず、大人に何かをしてもらうよりも、子供たちが自ら学んで行動を起こしてもらうことができるような仕組み作りを考えたのです。そこで、子供たちに検定を受けてもらって、その検定を通して防災の知識を得てもらいたいという思いから、この防災検定は始まりました。

【防災検定の意義】

検定の話が少し長くなってしまのですが、このジュニア防災検定は、普通の検定とは違うところがあります。一般的な検定は、知識の確認をして、筆記試験の点数で級を取るといったイメージがあると思います。私も検定試験が好きで、よく色々な検定を受けました。英語検定や珠算検定も受けましたし、級が上がるのを楽しみにしておりました。しかし、このジュニア防災検定が他と異なる点は、筆記試験の前後に自由課題の提出があります。2回のレポートの提出をしてもらいます。事前課題は、具体例をあげますと、家庭内で防災について話し合いをしたことがあれば、そのことについて書く、というものです。例えば棚の中においてあるものの順番一つにしても、重い物が上になっていないか、いざという時に被害が大きくなるような置き方はしていないかな、と家族で確認したことや、あるいは火の元、ガスの元栓の位置の確認などの小さなことでも、家族で話し合っ確認したことを書いて提出すること。これが事前の課題です。そして筆記試験で知識を確認してもらいます。

その後の事後課題として、主に検定を受けて確認し、身につけた知識をもとに、地域の防災マップを作るというものです。学校の仲間など、グループで地域を歩いて防災マップを作っているうちに、道の造りを覚えたり、近所の人々の近況やいざという時の対処法を学んでいくことができます。更に、周囲に関心を持つことで「安心安全」の防災の面だけではなく、防犯という面も身につけることができます。また、そうして町を歩くことで、思わぬ歴史や文化、史跡などに触れることもできる、と色々な勉強になるのですが、それを防災という視点を中心に書き込んでもらって、提出してもらうという検定です。

さらに筆記試験は一人でも受けられます。問題も持ち帰り可能にしております。これは防災検定が、得点を取るためのものではなく、知識を身に着けるための検定として成り立たせているからです。この防災検定はすでに実施されているのですが、子供たちがこの防災検定を受けて、家庭でキッチンを点検してみたり、家の間取りを確認したりすると、親御さんたちも一緒に見るようになるのです。子供の宿題を手伝う親が最近はどのくらいいるのかわかりませんが、子供が一生懸命にやっているものについて、親はより良いものになろうと

いう気持ち働きます。ですから、この検定は、親も自然に関わり、親にも防災について学んでもらう、いい機会でもあるのです。この活動を続けていくことで、そのうちに試験が無くても防災教育が当たり前のような時代が来れば嬉しいな、という志でやっているのが、このジュニア防災検定でございます。詳細についてはウェブサイトにもありますので、御覧ください。また、こちらのパンフレットをお帰りの際にお持ち下さい。

【昔話に描かれた災害・竹取物語】

さて、検定の説明はこれくらいにして、今度は表題となっている修学旅行と防災の話に入りたいと思います。わたくしの本業は、教科書に載っているような名作・名文・小説を暗記して舞台上で伝えるものでございます。学校の教科で言えば、国語が一番近いところかと思えます。古文ですと、日本最古の物語である「竹取物語」があります。

『今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきの造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。怪しがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてあたり。』

これが竹取物語の出だしです。そこで翁は日頃仕事をしている竹やぶの中で見つけた子だから自分の子にすべき子だと悟って、家に持ち帰って、たった三寸の子供を育てると、わずか3ヶ月で美しい女性になって男性にあれ持って来い、これ持って来いとまあ、好き勝手なことを言っていたのですが、そのうち帝の心をも揺るがすようになるのです。最後に「自分は月の国の人だから」ということで、誰とも結婚しないまま、旧暦の8月15日の望月の日に天人が迎えに来て、天に帰ってしまいます。絵本などはここで終わっているものもあるのですが、私は静岡出身で、一つどうしてもこだわっているところがありまして、実はこの後、物語のラストシーンに富士山が出てくるのです。ご存知のかたはいらっしゃいますか？天人に連れて行かれた後、帝はかぐや姫からもらった手紙と不老不死の薬を「姫がいないのに手元に持っても何になろう」と言って、天に一番近い山で焼かせようとして誰かに訊きました。すると、駿河国にある山が一番天に近く、都にも近いと言われたので、帝は多くの兵士を遣わせて山で薬と手紙に火を付け、燃やさせました。そうしてその山を富士の山といい、その煙が天に向かって上っていく、というのが本当のラストシーンです。せっかくなので、この部分を語らせて下さい。

『いづれの山か天に近き。』と問はせたまふに、ある人奏す。『駿河の国にあるなる山なむ、この都も近く、天も近くはべる。』と奏す。これを聞かせたまひて逢ふこともなみだにうかぶ我が身には死なぬ薬も何にかはせむ。かの奉る不死の薬に、また壺具して、御使ひに賜はず。勅使には、つきのいはかさといふ人を召して、駿河の国にあなる山の頂にもてつくべきよし仰せたまふ。嶺にてすべきやう教へさせたまふ。御文・不死の薬の壺ならばて、火をつけて燃やすべきよし仰せたまふ。そのよし承りて、つはものどもあまた具して山へ登りけるよりなむその山をふじの山とは名づけける。その煙いまだ雲の中へ立ちのぼ

るとぞ言ひ伝へたる。」

ここが物語の本当のラストシーンなのです。絵本などでもこのシーンがカットされているものは、私は不足に感じます。ちなみに、このように富士山の話をする時は、竹取物語では駿河国と出てくるので、太宰治の「富嶽百景」をセットにしてお話しするなど、山梨側の富士山の話もするようにしています。

さて、ここで注目していただきたいのが、富士山から煙が昇っていた、つまり噴火していたことが、こんな昔の物語にも記されているということです。万葉集の中にも、富士山の煙を自分の愛する人への恋心に喩えていたりするものが何首かあります。なにも有名な人の歌だけではなく、また、歌以外にも色々な文学作品の中に噴火の様子などが描写されていますので、そんな観点から防災について話をすることもできるのかな、と思います。

例えば伊豆に修学旅行に来て、富士山を見た時に、もし富士山が噴火したら火山灰なんか飛んでくるけれど、私達は どうしたらいいの？なんて考えることもできるわけです。一時期富士山は休火山だと言われていましたが、現在では活火山として分類されていますので、いつ噴火してもおかしくないと言われています。ですから、これからの修学旅行は防災を学ぶ良いチャンスになるのではないかというのが、私の考えでございます。

【昔話に描かれた災害・稲むらの火】

さて、わたくしは自分がやっている「語り」の世界を知っていただくために、「竹取物語」をやりましたが、他にも宮沢賢治や瀬戸内寂聴先生のお話や、童話や詩歌など様々な名作を語っております。その中に「竹取物語」よりももっと直接的に防災に役立つ名作があるということに気が付きました。気付かされたのは、私が和歌山県広川町に伝わる話を基にした「稲むらの火」という作品を語った時のことです。この作品は名作です。「The・日本の心」が込められた素晴らしい話だと感じました。庄屋さんが自らの財産を犠牲にして、村のみんなを助けるのです。この語りの仕事の管轄は文部科学省なのですが、「稲むらの火」を語っているうちに、全く思いもよらない方面から、語りの依頼がありました。それが防災関係、中央防災会議、それから消防など、全く違う方面でしたので、ひょっとしたらこれは防災教育に役立つのではないかと思ったのです。そして教育のために、と学校などからも依頼を頂くようになり、手が回らなくなってしまったのですが、語りの仲間が4人のユニットで防災講演をして回っております。

そのユニットの件で、実は今日、とても驚いたことがありました。八王子でわたくしが持っている講座の受講生に「中西さん」という方がいらっしゃいます。大変優秀な語りをされる方なのですが、昨日、講座の最後に呼び止められまして、「明日は主人が会場におりますので」と言われました。今日、会場に来てみたらなんと前理事長の中西先生の奥様だったとわかって、とてもびっくり致しました。ボランティアで講演をする、とても志の高いチームです。交通費のみで、どこへでもまいりますので、ぜひお声をかけていただければと思います。10分くらいのもので、修学旅行などでも大丈夫です。

簡単に紹介しますと、

『これは、ただごとでない。』とつぶやきながら、五兵衛は家から出て来た。今の地震は、別に烈しいといふほどのものではなかつた。しかし、長い、ゆつたりとしたゆれ方と、うなるやうな地鳴りとは、老いた五兵衛に、今まで経験したことのない、無気味なものであつた。」という出だしです。

そして高台にいる五兵衛が村を見下ろすと、村人は宵祭りの準備で気づかないが、そのまま海に目を移すと、五兵衛は津波がやって来ることに気が付いたのです。すぐにもやって来る津波から、下にいる村人をどう呼び寄せるかを考え、思いついたのが自分の庭に積んである稲の束に火を付けることです。その火を見て、山寺ではカンカンと早鐘を衝きはじめます。どこかで火事が起こったという知らせです。そこで下にいる村人が火事に気付いてあたりを見ると、庄屋さんの庭がボウボウと燃えているわけです。村人はみんなで火を消しに行こうとして山を駆け上がっていったので、津波から逃れることができた、という話です。庄屋さんの咄嗟の判断で、村のみんなは助かったのです。いくら自分のところの稲だとしても、本来なら納めるべき稲ですから、火を付けたことがわかれば昔は大変なご法度だったのに、です。

【「物語」が伝えたかったもの】

明治三陸津波の時に小泉八雲が、何か後世に教訓を残すことはできないかと考えた時、この和歌山の言い伝えを聞いて、英文にして発表しました。その中で、”Tsunami”とローマ字そのままに発表したことも、”Tsunami”が世界共通語になった一因とも言われております。小泉八雲は、当時の日本人が、どこかで火が見えると、みんなで消火する、みんなで助け合う心と行動があったことを、よくわかっていたのだと思います。だからこそ、この話のできたのでしょう。この話は、後に中井常蔵氏によって日本語に翻訳され、戦前の国語教科書に載りました。この、戦前の教科書で学ばれた方はいらっしゃいますか？今日はさすがにいらっしゃらないようですが…場所によっては10人以上の方から「懐かしい」と言われることもあります。戦前の教科書にもいいお話が沢山載っています。わたくしはこの話をあくまでも名作として語っていただけだったのですが、思わぬ方向、防災へ、「語り」で貢献することができるようになったという流れでございます。そして、この「稲むらの火」は、文章そのものも素晴らしいのですが、先人が何かしらの困難を生き抜いたときの教訓も沢山込められています。

そして先人達がなぜこれを伝えたかという、後世の人々に自分たちと同じ悲しい思いをしてほしくない、自分たちが今語り継がなければ誰が伝えるのだ、という想いがあったからです。その中には「津波てんでんこ」というものもあります。また伊豆の民話に、「稲むらの火」によく似た「波切り地蔵」の話があります。これはある正直者の米屋さんのところにある日、みすばらしい格好のご老人がやってきて「お米を下さい。」と言いました。この米屋の息子さんは寝たきりのお母さんの面倒を見ながら一人で店を切り盛りしていて誰で

あっても分け隔てなく接する人柄でしたので、言われたままにお米を渡しました。その老人はお米を受け取ると帰る間に「まもなく津波が来るから、寝たきりのおっかさんを背負ってあの山に逃げるといい」と近くが一番高い山を指さしました。そしてそのことを息子がお母さんに話しますと、ぼんやりと寝ていたお母さんが急にきりっとして「それは由緒ある人に違いない。すぐにみんなに知らせてあげなさい。」と言いました。そこで息子は近所の人に伝えようとするのですが、みんな笑って否定したのです。「地震も嵐も無いのに、なぜ津波が来るのか」と。しかしその息子さんはご老人のことを信じて、お母さんを背負って山を登って行くと、途中で津波が押し寄せて村を全部飲み込んでしまいました。これは民話の形で残っていますが、おそらくチリなどの海外で起きた地震の影響で、伊豆に大きな津波が来た時に大きな被害がでたことを、先人が必死に伝えようとした証ではないかと考えています。

【災害が結んだ友情】

かつて、内閣府の中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査会」というところで、一つずつの災害をまとめたことがありました。しかしまとめた調査報告書は専門的で難しく、とても一般人、まして子供に教えられるようなものではありませんでした。そこでその調査会の有志4人がこの報告書を子供向けに書こうじゃないか、ということで、見開きの2ページで、一つの災害がわかるように、子供でも読めるように漢字にはルビを振って、11話をまとめました。私も執筆したひとりです。一番初めは大阪に津波が来た話です。これは、当時一番近い過去の津波話しか教訓にしなかった為に失敗した話です。それより前に起きた地震津波のことも教訓としておけば、これほど多くの死者をだすことは無かったのに、という話を載せています。他にも、伊勢湾台風の話や、関東大震災の時に横浜の山下公園で人がの手当をし続けた、現在109歳になる日高 帝（ひだか てい）さんの話も掲載しています。

こういった物語の中に、私が15年前から嵌っているものがあります。こちらも和歌山の話なのですが、台風の時期になると必ず中継に出てくるくらい台風銀座として有名な、串本町の潮岬というところがあります。本州の最南端に位置しているのですが、そこからすぐの海を渡ったところにある紀伊大島沖で、かつて台風シーズンにトルコ、当時のオスマン帝国の軍艦が漂流してきたことがあります。そして、和歌山独特のあのゴツゴツとした岩礁に打ち付けられて、爆発沈没してしまったことがありました。その時に海に投げ出されて、岸まで辿り着いたトルコ人たちを、村人たちは懸命に救護しました。そして69名が助かりました。その69名を無事に送り届けたことがきっかけで、日本とトルコの大きな友情が結ばれたという話がございます。しかしこの話はそれで終わりではなく、それから95年の時を経て、イラン・イラク戦争のさなかに、日本人がテヘラン空港に取り残される事態になりました。フランスやドイツは、救援機がやってきて救出されていきました。そして当時のフセイン大統領は「3月19日20時以降にイラン上空を飛行する飛行機は、民間機であっても安全

を保証しない」という声明を發表しました。緊急声明を受けたものの、日本は様々な事情で助けに行くことができずにいました。そしてタイム・リミットが刻一刻と近づく中、トルコが「あのエルトゥールル号遭難の際に、日本人がしてくれた献身的な救護活動を私達は決して忘れてはけません。」と自国民用の救援機の最終便に特別便を加え、2機に増便して、テヘラン空港に向かいました。そしてテヘラン空港に到着すると、その救援機に日本人を優先的に搭乗させてくれました。そしてこの2機が空港を離れたのはタイム・リミットのおよそ1時間前でした。このように間一髪の救出作戦でした。そしてこの後の阪神・淡路大震災、東日本大震災の時にも、トルコの人々が救援に来てくれています。また、東日本大震災の約半年後にトルコで起きたマグニチュード7.2の地震のときは、こちらから民間側ですぐに助けに入っています。その後オリンピックで競いあつたりと、色々な話があるのですが、このような話を普段わたくしは、一つの物語として語っております。事故そのものの詳しいことは、内閣府の報告書にすべて掲載されております。インターネットでも、公開されておりますのでぜひご覧下さい。

こういった物語を語り伝えていくということが、今はとても重要になってきていると思います。何故かと申しますと東日本大震災でも、あるお寺の和尚さんが涙ながらに「私達も被災直後で、ショックを受けている最中です。でも記憶が新しいうちに、事の顛末を語って教訓を伝えなければ、今回犠牲になった人たちに申し訳ない。もう一度どこかで同じようなことがあつた時に、同じような犠牲者を出してしまつたら。」と言っていたからなのです。この和尚さんの、もう一度同じようなことがあつたときに、という言葉に込められた想いは、何も三陸に限つた話ではないのです。これから起きる南海トラフや東海地震で被害が出つたら、我々は申し訳ない、とおっしゃっているのです。日本人はおそらく今まで、何か起きる度にそんな思いをしてきたのだと思います。そういった思いを、埋没させていってはいけなさと、強く感じています。

修学旅行で、こうした各地に伝わる話をその土地の特徴とともに学ぶことも取り入れれば、旅先の安全安心に関する備えもより良くなるでしょう。

【修学旅行と防災】

修学旅行の思い出で、私は忘れられないことがありました。外を歩いていて、まもなく帰ろうという頃になって、突然土砂降りの雨に降られたことがありました。小学校の時ですので場所も思い出せないくらいに土砂降りの雨の印象が強く残っております。今はゲリラ豪雨なんていう言葉でイメージが湧くと思いますが、そのくらいに酷い雨でした。周りなんにも見えないくらいの雨、さらに夕方近くなのであたりは真っ暗になって、方向がわからなくなつてしまいました。私達4~5人の女の子のグループはあつちだこつちだと迷つてしまい、宿の方角もわからずにいたところ、男子のグループに会うことが出来ました。そのグループの中に一人、方向感覚に優れた子がいたのです。その子は、周りが何にも見えないはずなのに、見えているかのように「あつちだ！」と教えてくれました。私達は彼が誘導する

ままに、付いて行きました。そしてその子が「この先に宿があるはずだ」と言ったのです。よく見ると、うっすらと宿が見えてきてようやく「私達も帰れる！」と思ったのです。あの時、どんなに嬉しかったか、そして男子のグループと出会わなかったら、どこをさまよっていたかと考えると非常に恐ろしくなります。

どこかで雨宿りして、翌日にでも帰ればいいですが、最近では何が起こるか全くわかりません。命に関わることが起きるかもしれません。増水した川にうっかり足が嵌って流されることもあるかもしれません。ですから、あの時男子のグループに出会えたことは、とても幸運だったと思います。しかし、これを「偶々」とか「運が良かったから」としてしまうのは間違いです。防災というのは備えが重要です。熱心に、色々とやった結果、どうしても駄目だったときは「運が悪かった」といえるかもしれません。しかし何の努力もなしに助かったことを「運が良かった」と喜ぶのは良いこととは言えません。これからは基礎的な知識を身に付けなければいけない時代です。例えば修学旅行に行くときでも、班長は必ず道を知っていなければいけませんし、もしそういうのが得意な子がいれば、その子がリーダーやそれなりの係になることが大切ではないかと思います。また、そういう役目を担う子を見極めるのは、おそらく先生のほうが長けていらっしゃるでしょうから、ぜひお任せしたいと思います。

【防災学習と実践】

これから、防災の知識を身に付けなければいけないとは言いましたが、机上の知識では駄目なのです。実際に行動する知識、訓練で身に付ける知識も必要です。まず、修学旅行を実施する側の先生はもちろんですが、子供たち自身が行く先の防災マップなどを知っておいたり、学習しておくことも必要なことではないかと考えています。もちろん既に事前学習などもされているかとは思いますが、防災という観点からも学習しておくことは、万が一災害などに会ってしまった時の為に必要かと思っています。そして、家庭でも、防災学習をしたことを知っていることより良い結果になると考えています。最近では「学校にいる間は学校の責任だから」と責任を放棄している保護者も少なくないように伺っています。しかし、本来は、家庭が、そして親が自分で知識を身に付けて「自分の子供は自分で守る」ことを基本に、たとえ離れたところにおいても、きちんと連絡をとる手段を教えたりして欲しいと思うのです。いざという時の対処法を家でも、学校でも、そして出かけた先での対応も必要に応じて身に付けることこそが大切なことだと私は考えています。

そしてもう一つが受け入れ側の知識です。これからは受け入れ側の知識が、とても重要になってくると思います。行政だけでなく、民間もきちんと責任を感じてしっかりとした対応をして頂く必要があります。行政側としても、修学旅行を誘致するのであれば、防災マップを作成したり、地域の整備を行う必要があります。そして各地の情報をまとめる機能を担うのが代理店です。わたくしも個人的にイベント旅行など代理店に任せているものがあり

ます。しかし代理店というのは、業者さんですから利益を考える必要があります。もちろん利益は必要なのですが、志高く、「安心安全」を考えてくれるところなのか、利益のみを優先するところなのか様々です。その見極めが、学校側に必要になってくるのではないかと感じています。

もう一つ、あの東日本大震災以降、海の近くには行かせなくなった学校があると聞き及んでおります。わたくしは年度の後半に、ちょうど文化庁の文化交流使でトルコとドイツに派遣されます。トルコでは先ほどのエルトゥールル号の話をする事が決まっていますが、先週は和歌山県串本町へ行ってまいりました。そこでたまたま田嶋町長より直接お聞きした話なのですが、震災後、串本町へ来る予定の学校から、修学旅行先としてはどうか、と懸念する声が出てきたといいます。串本町では、震災前より海辺から高台までストレートに行くことができる高架道路を、鉄道をまたぐ形で作っており、高台にある避難所まで逃げるができることや、さらに震災後には海の体験に参加している子供たちが、すぐに高架道路に入ることでできる階段を作ったこと、防災マップを行政が作成していることなどを、学校へ案内していると聞きました。また、特に興味深く感じたのは、修学旅行の代金支払いの方法です。通常、代理店からの支払いは1ヶ月、2ヶ月後になりますが、時には3ヶ月を超えるようなこともあります。そこで、串本町では、受け入れ先の民家の皆さんで構成する協議会を作ってもらい、そこに行政が原資として2,000万円を貸し付けて、事業終了後10日程ですべて支払いができるように仕組みを変えたのだそうです。この仕組みのメリットは、一般家庭に泊まる民泊体験の場で、金額の多寡ではなく、記憶に新しいうちに、すぐにそのやりとりが行われるということで、これが結構受け入れる家の人たちの充実感を上げる大切なことなのだそうです。支払いまでの期間が早いか遅いかということと、旅行内容のプログラムの優劣とは別のことなので、私は受け入れ側の行政にも、こういった仕組みを整えることは大切なことだと思います。また、すべて代理店に任せっきりにするのではなく、当事者が、内容を精査し把握してから進めるのも必要なことで、これにより、大きな目で見れば代理店を育てることにもなると思います。そして日本の観光全体への寄与にもつながるものではないでしょうか。

本日の研究大会は観光庁も関わっていらっしゃるということで、この話をさせて頂きました。そこで最後にこの話をさせていただきます。もちろん、「防災」という視点のみで修学旅行を組み立てるのは難しい話です。

【最後に】

私は先ほど「見学型」という文言を初めて知りました。わたくしが子供の頃の修学旅行は、行き先が京都・奈良でした。それはそれでとても素晴らしいものでしたし、これからの子供たちにも日本の誇る京都・奈良の文化に触れていただきたいと思うのです。わたくしの本業から言っても、ぜひ京都の町から山でもみて、「春はあけぼの」などそういった文学作品の舞台をその目で見て欲しいという思いはありますが、今は「体験型学習」が情操教育に

は欠かせないものとされています。修学旅行は自分たちが普段いるところとは地形も、文化も違う地域での学習です。一度に学ぶには大変かも知れませんが、そこはかたなく歴史や文化について学ばせることができる機会でもあります。そして歴史や文化を学ぶ過程において、防災を取り入れることは難しいことではありません。なぜなら災害というのは、その土地の風土と密接に関わっているからなのです。ですから、これからの時代こそ、修学旅行の中で「防災」を教えられる良い機会になるのではないかと考えています。

ぜひ、災害教訓の語り継ぎという面にも興味を持っていただきながら、かけがえのない思い出を作るその場で、「防災」について一言でも言葉を交わし合う時間を持っていただく。そして、できましたらその結果を「ジュニア防災検定」の自由課題に反映していただけたら、とも思います。

そろそろ時間になりました。拙いお話で申し訳ありませんが、素晴らしい修学旅行が実施され、多くの子供たちが幸せな時間を過ごし、将来に向けた素晴らしい学びをされることをお祈りしながら、終わりにしたいと思います。

どうもありがとうございました。



全国修学旅行研究大会の歩み

公益財団法人 全国修学旅行研究協会

回	期日・開催地	主題・内容	主催・後援・協賛
第1回	昭和53年 7月6日 大阪市教育青年センター	<p>主題 「今後の修学旅行・自然教室・野外活動を考える」</p> <p>発表 山城 真 西宮市塩瀬中教諭 「日常の教育活動を生かした本校の校外学習」</p> <p>講演 高橋 哲夫 文部省初等中等教育局教科調査官 「学校教育の今日的課題と修学旅行・自然教室」</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 近畿地区公立中学校修学旅行委員会</p> <p>後援 文部省(現文部科学省) 大阪府教育委員会 京都府教育委員会 兵庫県教育委員会 奈良県教育委員会 滋賀県教育委員会 和歌山県教育委員会</p> <p>協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校修学旅行連合委員会</p>
第2回	昭和60年 10月22日 大宮市民会館	<p>主題 「自己教育力を育てる修学旅行」</p> <p>発表 瀧田 潔 宇都宮市立横田中学校教諭 「修学旅行を通じての自己啓発」</p> <p>講演 加藤 隆勝 筑波大学教授 「現代青少年の心理と集団行動」 高橋 哲夫 文部省初等中等教育局教科調査官 「自己教育力を育てる修学旅行」</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 関東地区公立中学校修学旅行委員会</p> <p>後援 文部省(現文部科学省) 埼玉県教育委員会 千葉県教育委員会 茨城県教育委員会 栃木県教育委員会 群馬県教育委員会 大宮市教育委員会</p> <p>協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校修学旅行連合委員会</p>
第3回	昭和61年 11月14日 兵庫県私学会館	<p>主題 「集団宿泊指導の積み重ねによる修学旅行」</p> <p>発表 坂東鐵二 西宮市甲陵中教諭 「1年生からの校外学習の積み重ねによる修学旅行」 雨宮 章 長岡京市四中教諭 「生徒の自主的・実践的態度を育てる修学旅行・野外活動」</p> <p>講演 高橋 哲夫 文部省初等中等教育局教科調査官 「特別活動の充実と今後の修学旅行のあり方」</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 近畿地区公立中学校修学旅行委員会</p> <p>後援 文部省(現文部科学省) 大阪府教育委員会 京都府教育委員会 兵庫県教育委員会 奈良県教育委員会 滋賀県教育委員会 和歌山県教育委員会</p> <p>協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校修学旅行連合委員会</p>
第4回	昭和62年 11月20日 名古屋市立教育会館	<p>主題 「新しい 修学旅行の実践をめぐって」</p> <p>発表 後藤 幾郎 名古屋市立平針中学校校長 「思い出に残る修学旅行の実践を求めて」 伊藤 一美 各務原市立緑陽中学校教諭 「班行動を核にした東京連泊修学旅行」 土屋 豊 半田市立亀崎中学校教諭 「生徒が作る修学旅行」</p> <p>講演 高橋 哲夫 文部省初等中等教育局教科調査官 「学校教育改善の方向と今後の修学旅行のあり方」</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 東海三県中学校修学旅行委員会</p> <p>後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 岐阜県教育委員会 愛知県教育委員会 三重県教育委員会 名古屋市教育委員会</p> <p>協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校修学旅行連合委員会</p>

回	年次・開催地	主題・内容	主催・後援・協賛
第5回	昭和63年 11月25日 茨城県立 県民文化センター	<p>主題 「みんなが創る修学旅行」</p> <p>発表 宮本千代子 土浦市立第六中学校教諭 「生徒自身の生徒の手による修学旅行」 川上 徹 日立市立豊浦中学校教諭 「お互いを高めあうグループ別見学学習」 須藤 数彦 下館市立下館中学校教諭 「生徒と教師が共につくり、触れ感じる修学旅行」</p> <p>講演 高橋 哲夫 文部省初等中等教育局教科調査官 「学習指導要領改訂の方向について」</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 関東地区公立中学校修学旅行委員会</p> <p>後援 文部省(現文部科学省) 埼玉県教育委員会 千葉県教育委員会 茨城県教育委員会 栃木県教育委員会 群馬県教育委員会 大宮市教育委員会</p> <p>協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会</p>
第6回	平成元年 12月1日 大阪府教育会館	<p>主題 「特色のある修学旅行生徒の自主性を生かして」</p> <p>発表 荻野 南子 西宮市深津中学校教諭 「生徒たちの創意工夫を生かした修学旅行。リーダーの育成と班別自由行動」 林 一幸 富田林市三中学校教諭 「集団作りの中の修学旅行。自主性の創造をめざして」</p> <p>講演 高橋 哲夫 文部省初等中等教育局教科調査官 「個性を生かす教育と修学旅行」</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 近畿地区公立中学校修学旅行委員会</p> <p>後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 大阪府教育委員会 京都府教育委員会 兵庫県教育委員会 奈良県教育委員会 滋賀県教育委員会 和歌山県教育委員会 大阪市教育委員会</p> <p>協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会</p>
第7回	平成2年 11月28日 リテイィン豊橋 リテイィンホール	<p>主題 「連帯感の育成を図る特色ある修学旅行」</p> <p>発表 鎌田 孝一 豊橋市立青陵中学校教諭 「集団意識を高める手作りの修学旅行」 松崎 一三 名張市立南中学校校長 「特色ある修学旅行の実施を求めて」 土屋 豊 半田市立亀崎中学校教諭 「生徒が作る修学旅行」</p> <p>講演 高橋 哲夫 文部省初等中等教育局教科調査官 「学校教育改善の方向と今後の修学旅行のあり方」</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 東海三県中学校修学旅行委員会</p> <p>後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 岐阜県教育委員会 愛知県教育委員会 三重県教育委員会 豊橋市教育委員会</p> <p>協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会</p>
第8回	平成3年 11月28日 千葉県佐倉市 志津コミュニティセンター	<p>主題 「集団の中で自己を求めて協力しあう修学旅行をもとめて」</p> <p>発表 斉藤 正行 市原市立 国分寺台西中学校教諭 「リーダー養成を中心にすえた修学旅行」 山田 守人 柏市立第五中学校教諭 「班別テーマを持った修学旅行を作る」</p> <p>講演 渡部 邦雄 文部省初等中等教育局教科調査官 「集団の中に自己を生かす修学旅行」</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 関東地区公立中学校修学旅行委員会</p> <p>後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 埼玉県教育委員会 千葉県教育委員会 茨城県教育委員会 栃木県教育委員会 群馬県教育委員会 佐倉市教育委員会 千葉県小中学校長会</p> <p>協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会</p>

	年次・開催地	主題・内容	主催・後援・協賛
第9回	平成4年 11月27日 神戸市総合教育センター	<p>主題 「視野を広げ、心豊かな人間性を育成する修学旅行」</p> <p>発表 脇坂健一郎 美原西中学校教諭 「よく食べ、よく学び、よく遊ぼう」 平位 隆明 姫路市立 東光中学校教諭 「心の豊かさを求める修学旅行」</p> <p>講演 鹿嶋研之助 文部省初等中等教育局教科調査官 「特別活動における修学旅行の意義」</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 近畿地区公立中学校修学旅行委員会</p> <p>後援 文部省(現文部科学省) 兵庫県教育委員会 大阪府教育委員会 京都府教育委員会 奈良県教育委員会 滋賀県教育委員会 和歌山県教育委員会 神戸市教育委員会</p> <p>協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会</p>
第10回	平成5年 11月26日 名古屋市教育センター	<p>主題 「自主的活動と体験を重視した修学旅行」</p> <p>発表 長谷川濃里 一宮市立南部中学校教諭 「自主的に活動できる生徒を目指して」 —東京班別自主行動ができるまで— 松田 孝弘 関市立緑が丘中学校校長 「買い物ツアーからの脱却を」 —生徒の欠損体験を補う校外学習— 土屋 豊 半田市立亀崎中学校教諭 「生徒が作る修学旅行」</p> <p>講演 渡部 邦雄 文部省初等中等教育局教科調査官 「修学旅行と体験学習」</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 東海三県中学校修学旅行委員会</p> <p>後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 岐阜県教育委員会 愛知県教育委員会 三重県教育委員会 名古屋市教育委員会</p> <p>協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会</p>
第11回	平成6年 11月28日 宇都宮市 プラザいくろかみ	<p>主題 「自主的に活動し自ら学ぶ修学旅行」</p> <p>発表 田上 富男 市見町立市見中学校教諭 「3年間を見通し自ら学び取る力の育成 を目指す修学旅行」 —事前・事中/事後の一貫した指導を とおして— 吉田 真隆 宇都宮市立豊郷中学校教諭</p> <p>講演 「研究テーマの設定を中心に生徒自らが 計画した修学旅行の実践」 大槻 達也 文部省初等中等教育局中学校課課長 補佐兼環境教育専門官 「修学旅行における生徒の自主性」</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 関東地区公立中学校修学旅行委員会</p> <p>後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 埼玉県教育委員会 千葉県教育委員会 茨城県教育委員会 栃木県教育委員会 群馬県教育委員会 佐倉市教育委員会 千葉県小中学校長会</p> <p>協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会</p>
第12回	平成7年 11月28日 大阪府教育会館	<p>主題 「体験を重視し、自ら学ぶ意欲を 高め、心に残る修学旅行を求めて」</p> <p>発表 中山 宏、伝刀永一 河内長野市立長野中教諭 「生徒の主体性を重んじた修学旅行の創造」 江口直宏(川西市東谷中教諭) 「修学旅行を通して自治・学習・友情を 高める」</p> <p>講演 鹿嶋研之助 文部省初等中等教育局教科調査官 「修学旅行における体験学習」</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 近畿地区公立中学校修学旅行委員会</p> <p>後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 大阪府教育委員会 京都府教育委員会 兵庫県教育委員会 奈良県教育委員会 滋賀県教育委員会 和歌山県教育委員会 大阪市教育委員会</p> <p>協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会</p>

回	年次・開催地	主題・内容	主催・後援・協賛
第13回	平成8年 12月4日 名古屋市 教育センター	<p>主題 「主体性を伸ばし、行動力を高める修学旅行」</p> <p>発表 井辰 幸治 名古屋市立城山中学校教諭 「伝統工芸学習を取り入れた修学旅行」 －東京班別自主行動ができるまで－ 豊田真理子 津市立西橋内中学校教諭 「自ら考え行動する修学旅行をめざして」 －生徒の欠損体験を補う校外学習－ 土屋 豊 半田市立亀崎中学校教諭 「生徒が作る修学旅行」</p> <p>講演 成田 國英 東京家政学院大学教授 「教育の今日的課題－修学旅行への期待－」</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 東海三県中学校修学旅行委員会</p> <p>後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 岐阜県教育委員会 愛知県教育委員会 三重県教育委員会 名古屋市教育委員会</p> <p>協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会</p>
第14回	平成9年 11月28日 浦和市民会館	<p>主題 「主体性を伸ばし、行動力を高める修学旅行」</p> <p>発表 田村 俊明 鷺宮市立鷺宮中学校校長 「生徒の知恵と発想を大事にし、主体的に生きる力を育む修学旅行」 金子 桂一 鴻巣市立西中学校教諭 「自主的活動を目指した修学旅行」</p> <p>講演 森嶋 昭伸 文部省初等中等教育局教科調査官 「学校教育の転換と修学旅行への期待」</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 関東地区公立中学校修学旅行委員会</p> <p>後援 文部省(現文部科学省) 埼玉県教育委員会 千葉県教育委員会 茨城県教育委員会 栃木県教育委員会 群馬県教育委員会 浦和市教育委員会 埼玉県、千葉県、茨城県、栃木県、 群馬県各中学校長会 全日本中学校長会 埼玉県連合教育研究会特別活動部会</p> <p>協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会</p>
第15回	平成10年 11月20日 西宮市 フレンテホール	<p>主題 「体験を重視し、生きる力を育成する修学旅行」</p> <p>発表 寺田孝志 (堺市浜寺南中教諭) 「生徒の自主性を生かす修学旅行」 －実行委員会活動を中心に－ 鶴山実紀子 (西宮市山口中教諭) 「ウォークラリーから始めた修学旅行 班別行動の試み」</p> <p>講演 成田 國英 東京家政学院大学教授 「教育課程改訂と修学旅行」</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会</p> <p>後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 兵庫県教育委員会 大阪府教育委員会 和歌山県教育委員会 奈良県教育委員会 京都府教育委員会 滋賀県教育委員会 西宮市教育委員会 全日本中学校長会</p> <p>協賛 近畿地区公立中学校修学旅行委員会</p>
第16回	平成11年 11月19日 岡崎市 せきれいホール	<p>主題 「体験を重視し、生きる力を培う修学旅行」</p> <p>発表 清水 憲雄 岐阜市陽南中学校教諭 久保田尚志 岐阜市陽南中学校教諭 「体験活動を通して、学級の目指す姿を見つめる旅」 三和 道徹 豊橋市立東陵中学校教諭 「生きる力を育てる修学旅行」</p> <p>講演 森嶋 昭伸 文部省初等中等教育局教科調査官 「生きる力とこれからの修学旅行」</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 東海三県中学校修学旅行委員会</p> <p>後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 岐阜県教育委員会 愛知県教育委員会 三重県教育委員会 名古屋市教育委員会 岡崎市教育委員会 愛知県小中学校長会 全日本中学校長会</p> <p>協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会</p>

回	年次・開催地	主題・内容	主催・後援・協賛
第17回	平成12年 11月17日 群馬県 生涯学習センター	<p>主題 「生きる力を育てる修学旅行」</p> <p>発表 高橋隆雄 新治村立新治中学校教諭 「自主的に取り組む班別行動をめざした修学旅行」 埴田 榮一 田中 充弘 長野原町立西中学校教諭 「自ら学び、自ら考え、生き生きと活動する修学旅行」</p> <p>講演 森嶋 昭伸 文部省初等中等教育局教科調査官 「これからの学校教育と修学旅行」</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 関東地区公立中学校修学旅行委員会</p> <p>後援 文部省(現文部科学省) 都道府県教育長協議会 埼玉県教育委員会 千葉県教育委員会 茨城県教育委員会 栃木県教育委員会 群馬県教育委員会 前橋市教育委員会 埼玉県、千葉県、茨城県、栃木県、 群馬県各中学校長会 全日本中学校長会 群馬県中学校教育研究会特別活動部会</p> <p>協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会</p>
第18回	平成13年 11月22日 大阪府 たかつガーデン	<p>主題 「体験的学習を通して生きる力を育成する修学旅行」</p> <p>発表 中村勝成 田中 繁 松原市立松原第二中学校教諭 「総合的な学習にリンクさせた修学旅行」 岡田みどり 伊丹市立東中学校教諭 「自立をめざす三年間をみずえた学校行事づくり」</p> <p>講演 森嶋 昭伸 文部省初等中等教育局教科調査官 「学校教育の転換と修学旅行」</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会</p> <p>後援 文部科学省 全日本中学校長会 都道府県教育長協議会 大阪府教育委員会 兵庫県教育委員会 奈良県教育委員会 和歌山県教育委員会 京都府教育委員会</p> <p>協賛 近畿地区公立中学校修学旅行委員会</p>
第19回	平成14年 11月22日 名古屋 ルプラ王山	<p>主題 「体験を重視し、生きる力を培う修学旅行」</p> <p>発表 今村 新次 板倉 徳子 四日市市立西陵中学校教諭 「生徒が主体的に取り組む修学旅行」 横田 里志 稲沢市立明治中学校教諭 「自ら考え ともに学ぶ修学旅行」 一総合的な学習の時間『ともに生きる の中に位置付けて一 三和 道徹 豊橋市立東陵中学校教諭 「生きる力を育てる修学旅行」</p> <p>講演 宮川 八岐 文部省初等中等教育局視学官 「新しい学校づくりと修学旅行」</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会 東海三県中学校修学旅行委員会</p> <p>後援 文部科学省 都道府県教育長協議会 岐阜県教育委員会 愛知県教育委員会 三重県教育委員会 名古屋市教育委員会 岡崎市教育委員会 愛知県小中学校長会 全日本中学校長会</p> <p>協賛 関東・東海・近畿三地区公立中学校 修学旅行連合委員会</p>

回	年次・開催地	主題・内容	主催・後援・協賛
第20回	平成15年 10月31日 日本青年館	<p>主題 「みんなで創ろう 21世紀の修学旅行」 — 旅の原点から新しい修学旅行を考える— 提案 山本 精五 (財)全修協 「学習者主体の修学旅行」 発表 栗原 勝義 さいたま市立 三室中学校教諭</p> <p>パネルディスカッション 「人間にとって『旅』とは何か」 コーディネーター 石森 秀三 国立民族学博物館民族社会研究 部長・教授</p> <p>パネリスト 川邊 重彦 東京都武蔵野市教育長 小野 具彦 全日本中学校長会長 (東京都中野区立中央中学校校長) 天野隆太郎 (株)JAL セールス 東日本支社 顧客販売部 グループ長 柴田 憲信 ガク・アソシエイツ 海外旅 行総合研究所主任研究員</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会</p> <p>後援 文部科学省 全日本中学校長会 全国連合小学校長会 全国高等学校長協会 日本私立中学高等学校連合会 全国都道府県教育長協議会 関東地区公立中学校修学旅行委員会 東海三県中学校修学旅行委員会 近畿地区公立中学校修学旅行委員会</p> <p>協賛 都市農山漁村交流活性化機構 近畿日本ツーリスト株式会社 近畿日本ツーリスト協定旅館ホテル連盟 観光経済新聞社 日本教育新聞社</p>
第21回	平成16年 11月20日 日本科学未来館	<p>主題 「みんなで創ろう 21世紀の修学旅行」 — 修学旅行における自己発見 — 全修協提案 新しい修学旅行の方向性 (学びを中核とした修学旅行実践の変化) 提案者 柳川達郎 (財)全修協 理事</p> <p>1. 実践発表 (1) 修学旅行実施事例 石井 基一 氏 (文化女子大学附属杉並中学・高等学校 中学部長) (2) 受入側の実践発表 金森 英樹 氏 (株式会社オハヨーサン 代表取締役社長)</p> <p>2. シンポジウム 「修学旅行における自己発見」 コーディネーター 亀井 浩明 氏 (帝京大学 名誉教授)</p> <p>パネリスト 新山 雄次 氏 (文部科学省初等中等局児童生徒課 課長補佐) 野原 明 氏 (文化女子大学附属杉並中学・高等学校 校長) 宮地 信良 氏 (有限会社自然計画 代表取締役) 吉田 新 氏 (近畿日本ツーリスト株式会社 立川支店課長)</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会</p> <p>後援 文部科学省 東京都教育委員会 全日本中学校長会 全国連合小学校長会 全国高等学校長協会 日本私立中学高等学校連合会 全国都道府県教育長協議会 関東地区公立中学校修学旅行委員会 東海三県中学校修学旅行委員会 近畿地区公立中学校修学旅行委員会</p> <p>協賛 都市農山漁村交流活性化機構 近畿日本ツーリスト株式会社 近畿日本ツーリスト協定旅館ホテル連盟 観光経済新聞社 日本教育新聞社</p>

回	年次・開催地	主題・内容	主催・後援・協賛
第22回	平成17年 11月12日 (土) 日本科学未来館	<p>主題「修学旅行における『学び』の創造」 ～学びを中核とした修学旅行の創造～ 全修協提案 「修学旅行の危機管理について」 提案者 久保行正 (財)全修協理事</p> <p>1. 実践発表 (1) 修学旅行実施事例 高山利三郎氏 千葉県我孫子市立湖北台中学校校長</p> <p>(2) 受入側の実践発表 岸本 登 氏 大津市「びわ湖畔八景館」代表取締役</p> <p>2. シンポジウム 「学びを中核とした修学旅行の創造」 コーディネーター 新井郁男氏 (放送大学教授・上越教育大学名誉教授 埼玉学習センター所長)</p> <p>パネリスト 吉田 章 氏 (筑波大学大学院教授) 後藤 太 氏 (全日空東京支店法人販売部文化交流担当 部長) 高山利三郎氏 (千葉県我孫子市立湖北台中学校校長) 石塚浩哉氏 (近畿日本ツーリスト(株)第一教育支店 次長)</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会</p> <p>後援 文部科学省 全日本中学校長会 全国連合小学校長会 全国高等学校長協会 日本私立中学高等学校連合会 全国都道府県教育長協議会 東京都教育庁</p> <p>協賛 都市農山漁村交流活性化機構 近畿日本ツーリスト株式会社 近畿日本ツーリスト協定旅館ホテル連盟 観光経済新聞 日本教育新聞 教育出版</p>
第23回	平成18年 11月11日 (土) 日本科学未来館	<p>主題「修学旅行における『学び』の創造」 －学校教育における修学旅行の果たす役割－ 挨拶：文部科学省初等中等教育局児童生徒課 課長補佐 倉見昇一氏 東京都中学校長会会長 草野一紀氏</p> <p>1. 全修協報告 「海外修学旅行の動向」 報告者 吉野憲二 (財)全修協部長</p> <p>2. 全修協提案 「体験学習の成果と課題」 報告者 久保行正 (財)全修協理事</p> <p>3. 実践発表 「修学旅行における海外交流活動」 山下俊郎氏 岐阜大学教育学部附属中学校 教諭</p> <p>4. シンポジウム 「学校教育における修学旅行の 果たす役割」</p> <p>コーディネーター 高階玲治氏 教育創造センター所長</p> <p>シンポジスト 大橋久芳氏 忍岡中学校長、前全日本中学校 長会長 山下俊郎氏 岐阜大学教育学部附属中学校 教諭 高橋正洋氏 近畿日本ツーリスト第3教育次 長 杉本敏和氏 全修協大阪事務局長</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会</p> <p>後援 文部科学省 全日本中学校長会 全国連合小学校長会 全国高等学校長協会 日本私立中学高等学校連合会 全国都道府県教育長協議会 東京都教育庁 都市農山漁村交流活性化機構</p> <p>協賛 近畿日本ツーリスト株式会社</p>

回	年次・開催地	主題・内容	主催・後援・協賛
第24回	平成19年 7月31日(火) ホテルグランド ヒル市ヶ谷	<p>1部 全修協創立50周年記念式典</p> <p>2部 第24回全国修学旅行研究大会 主題「子供の未来を拓く修学旅行の役割」</p> <p>1. 全修協提案 「地域の活性化と修学旅行の役割」 提案者 久保行正 (財)全修協理事</p> <p>2. 実践報告 「新しい修学旅行の試み(防災学習)」 報告者 田村賢一氏 人と未来防災センター 企画運営部長</p> <p>3. 記念講演 「教育の動向と学校の取り組み」 天笠 茂氏 千葉大学教授</p> <p>3部 全修協創立50周年祝賀会</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会</p> <p>後援 文部科学省 全日本中学校長会 全国連合小学校長会 全国高等学校長協会 日本私立中学高等学校連合会 全国都道府県教育長協議会 東京都教育庁 都市農山漁村交流活性化機構 近畿日本ツーリスト協定旅館ホテル連盟 観光経済新聞 日本教育新聞 教育出版</p> <p>協賛 近畿日本ツーリスト株式会社</p>
第25回	平成20年 7月31日(木) ホテルグランド ヒル市ヶ谷	<p>主題「感動ある修学旅行の実現」 研究主題「感性をはぐくむ修学旅行の展開」</p> <p>挨拶：文部科学省初等中等教育局児童生徒課 課長補佐 大西 真次氏</p> <p>国土交通省大臣官房 審議官 西阪 昇氏</p> <p>1. 全修協提案 「感性をはぐくむ修学旅行」 提案者 山本 精五 (財)全修協事務局長</p> <p>2. 実践報告 「学校の情報教育と修学旅行」 大西 勝巳氏 京都府立西舞鶴高等学校教諭 碓井 裕行氏 京都府立須知高等学校教諭</p> <p>「感動がある物語がある九州への修学旅行」 甲斐 和郎氏 九州観光推進機構国内誘致推進部長</p> <p>3. 講演 「感性豊かな教育の創造」 長南 博昭氏 山形大学地域教育文化学部教授 日本感性教育学会副理事長(みちのく副代表)</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会</p> <p>後援 文部科学省 東京都教育委員会 全日本中学校長会 全国連合小学校長会 全国高等学校長協会 日本私立中学高等学校連合会 都市農山漁村交流活性化機構 近畿日本ツーリスト協定旅館ホテル連盟 観光経済新聞 日本教育新聞 教育家庭新聞</p> <p>協賛 近畿日本ツーリスト株式会社</p>

回	年次・開催地	主題・内容	主催・後援・協賛
第26回	平成21年 7月31日(金) ホテルグランド ヒル市ヶ谷	<p>主題「心に響く修学旅行の展開」 研究主題「感性をはぐくむ修学旅行の探究」</p> <p>挨拶：文部科学省初等中等教育局児童生徒課 課長 磯谷 桂介氏 国土交通省観光庁 審議官 甲斐 正彰氏 近畿日本ツーリスト株式会社 専務取締役 越智 良典氏</p> <p>1. 全修協提案 「修学旅行を通して生きる力を育てる」 提案者 鈴木 和夫 (財)全修協理事</p> <p>2. 実践報告 「交流茶会と世界遺産への献茶式体験を通して 感性を磨く修学旅行」 戸倉 文夫氏 栃木県上三川町立上三川中 学校長 國武 利行氏 熊本県修学旅行受入促進協議 会宿泊部理事</p> <p>3. 講演 「感性と学習のときめき」 —修学旅行での出会い— 三浦 修一氏 横浜国立大学附属教育実践総 合センター研究員</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会</p> <p>後援 文部科学省 全日本中学校長会 全国連合小学校長会 全国高等学校長協会 日本私立中学高等学校連合会 東京都教育委員会 都市農山漁村交流活性化機構 近畿日本ツーリスト協定旅館ホテル連盟 観光経済新聞 日本教育新聞 教育家庭新聞</p> <p>協賛 近畿日本ツーリスト株式会社</p>
第27回	平成22年 7月28日(水) ホテルグランド ヒル市ヶ谷	<p>主題「感性をはぐくむ修学旅行の展開」 研究主題「修学旅行・学びの検証」</p> <p>挨拶：文部科学省初等中等教育局児童生徒課 課長 磯谷 桂介氏 観光庁 審議官 甲斐 正彰氏 近畿日本ツーリスト株式会社 専務取締役 越智 良典氏</p> <p>1. 全修協提案 「生徒の成長と修学旅行」 提案者 金子 泰久 (財)全修協部長</p> <p>2. 実践報告 「震災学習を通して生き方を 見つめ直す修学旅行」 小泉 城一氏 千葉県野田市立北部中学校 教諭 「県立高等学校初の海外修学旅行」 —生徒の『夢』を乗せてのフライト— 木田 一彦氏 埼玉県立志木高等学校教頭 和田 延裕氏 埼玉県立志木高等学校教諭</p> <p>3. 講演 「修学旅行に期待すること」 辻村 哲夫氏 共立女子学園常務理事</p>	<p>主催 財団法人 全国修学旅行研究協会</p> <p>後援 文部科学省 観光庁 全日本中学校長会 全国連合小学校長会 全国高等学校長協会 日本私立中学高等学校連合会 東京都教育委員会 都市農山漁村交流活性化機構 近畿日本ツーリスト協定旅館ホテル連盟 観光経済新聞 日本教育新聞 教育家庭新聞</p> <p>協賛 近畿日本ツーリスト株式会社</p>

回	年次・開催地	主題・内容	主催・後援・協賛
第28回	平成23年 7月27日(水) ホテルグランド ヒル市ヶ谷	<p>主題「感性をはぐくむ修学旅行の展開」 研究主題「修学旅行を子どもに開く」 挨拶：文部科学省初等中等教育局児童生徒課 課長 白間竜一郎氏 観光庁審議官 山田 尚義氏 近畿日本ツーリスト株式会社 常務取締役 市井 正之氏 前・全日本中学校長会長 新藤 久典氏</p> <p>1. 全修協提案 「感性をはぐくむ修学旅行の実施に向けて」 提案者 鈴木 和夫(公財)全修協常務理事</p> <p>2. 実践報告 「歴史を学び心に刻んだ修学旅行」 鈴木 久雄氏 栃木県栃木市立都賀中学校教</p> <p>3. 講演 「人はなぜ旅をするか」 中西 進氏 池坊短期大学長</p>	<p>主催 公益財団法人 全国修学旅行研究協会</p> <p>後援 文部科学省 観光庁 全日本中学校長会 全国連合小学校長会 全国高等学校長協会 日本私立中学高等学校連合会 東京都教育委員会 都市農山漁村交流活性化機構 近畿日本ツーリスト協定旅館ホテル連盟 観光経済新聞 日本教育新聞 教育家庭新聞</p> <p>協賛 近畿日本ツーリスト株式会社</p>
第29回	平成24年 7月30日(月) ホテルグランド ヒル市ヶ谷	<p>主題「感性をはぐくむ修学旅行」 研究主題「学びの集大成を図る修学旅行」 挨拶：文部科学省初等中等教育局 視学官 三好 仁司氏 観光庁観光産業課長 寺田 吉道氏 近畿日本ツーリスト株式会社 常務取締役 市井 正之氏</p> <p>1. パネル・プロポジション 「修学旅行の安全確保」(修学旅行の危機管理) コーディネーター：中西 朗氏 前全修協理事長 パネラー：佐藤浩樹氏(文部科学省) 垣花 誠氏(糸満高校) 安次嶺織恵氏(KNT沖縄) 松本浩一氏(オリエンタルランド) 萩原豪人氏(臨床心理士)</p> <p>2. 講演 「文化を大切に作る社会の創造」 玉井 日出夫氏 玉川大学教育博物館館長</p>	<p>主催 公益財団法人 全国修学旅行研究協会</p> <p>後援 文部科学省 観光庁 全日本中学校長会 全国連合小学校長会 全国高等学校長協会 日本私立中学高等学校連合会 東京都教育委員会 都市農山漁村交流活性化機構 近畿日本ツーリスト協定旅館ホテル連盟 観光経済新聞 日本教育新聞 教育家庭新聞</p> <p>協賛 近畿日本ツーリスト株式会社</p>
第30回	平成25年 7月30日(火) ホテルグランド ヒル市ヶ谷	<p>主題「感性をはぐくむ修学旅行」 研究主題「学びの集大成を図る修学旅行」 ～被災地復興への継続的支援～ 挨拶：文部科学省初等中等教育局児童生徒課 課長 白間竜一郎氏 観光庁総務課長 水嶋 智氏 近畿日本ツーリスト株式会社 代表取締役専務 田ヶ原 聡氏</p> <p>1. 全修協提案 「学びの集大成を図る修学旅行」について 提案者 山本 精五(公財)全修協部長</p> <p>2. 実践報告 1) 「被災地への修学旅行」 牛島正廣氏 東京都目黒区立東山中学校前校長 小川隆一氏 東京都目黒区立東山中学校教諭 奥村健夫氏 東京都目黒区立東山中学校教諭 2) 「被災地からの修学旅行」 高橋裕子氏 宮城県東松島市立鳴瀬未来中学校校長 菅原正嗣氏 宮城県東松島市立鳴瀬未来中学教諭</p> <p>3. 講演 「日本を元気に、地域を元気に」 溝畑 宏氏 京都大学経営管理大学院特命教授 前観光庁長官</p>	<p>主催 公益財団法人 全国修学旅行研究協会</p> <p>後援 文部科学省 観光庁 全日本中学校長会 全国連合小学校長会 全国高等学校長協会 日本私立中学高等学校連合会 東京都教育委員会 都市農山漁村交流活性化機構 近畿日本ツーリスト協定旅館ホテル連盟 観光経済新聞 日本教育新聞 教育家庭新聞</p> <p>協賛 近畿日本ツーリスト株式会社</p>

<p>第 31 回</p>	<p>平成 26 年 7 月 29 日 (火) ホテルグランド ヒル市ヶ谷</p>	<p>主題「感性をはぐくむ修学旅行」 研究主題「学びの集大成を図る修学旅行」 ～被災地復興への継続的支援～ 挨拶：文部科学省初等中等教育局 視学官 高橋 正敏氏 観光庁観光産業課長 石原 大氏 近畿日本ツーリスト株式会社 代表取締役専務 田ヶ原 聡氏</p> <p>1. 全修協提案 「修学旅行に何を求めるのか」について 提案者 中西 朗 (公財) 全修協前理事長</p> <p>2. 実践報告 1) 「東北には人を変える場がある」 中嶋利昭氏 福岡県筑紫女学園中学・高等学校前 校長 (福岡県立修猷館高等学校 前校長) 2) 「被災地学校修学旅行支援事業」 佐伯登志男氏 愛媛県経済労働部しまのわ 2014 推 進監</p> <p>3. 講演 「修学旅行の思い出と防災」 平野啓子氏 語り部・かたりすと、元 NHK キャス ター、大阪芸術大学教授、防災検定協</p>	<p>主催 公益財団法人 全国修学旅行研究協会</p> <p>後援 文部科学省 観光庁 全日本中学校長会 全国連合小学校長会 全国高等学校長協会 日本私立中学高等学校連合会 東京都教育委員会 都市農山漁村交流活性化機構 近畿日本ツーリスト協定旅館ホテル連盟 観光経済新聞 日本教育新聞 教育家庭新聞</p> <p>協賛 近畿日本ツーリスト株式会社</p>
-----------------------	------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

* 第 19 回大会までは三地区持ち回りで開催。第 20 回大会から東京での開催となる。

* 平成 23 年度より公益財団法人全国修学旅行研究協会となる。

第31回全国修学旅行研究大会
－報告書－

平成26年11月1日

発行 公益財団法人 全国修学旅行研究協会
[事務局] 〒102-0074 東京都千代田区九段南 2-6-8
TEL:03-5275-6651 FAX:03-5275-6653
E-MAIL:shuryo@h2.dion.ne.jp
URL: <http://shugakuryoko.com>